

45-502



官話指南總譯

吳泰壽著

東京 文求堂藏版

明治
11
丙午

大日本明治
三十八年春
刊行于東京

官話指南總譯目次

酬應瑣談	一
官商吐屬	二五
使令通話	一四三
官話問答	一八七
應對須知(舊版)	二四七

官話指南總譯

官話指南第一卷

酬應瑣談

第一章

吳泰壽譯

從先
第二回
目
第一回
目
計算
ツモリ、
豫算

光景
日數、問

打
開
合
ス

汝は今度初めて此處へ御來になつたのですか。私は以前一度來ました
 が數日間滞在して直に歸りました。今度が二度目です。左様で
 すか。此度御來になりましたのは、此處で何か商賣を御始めになる御積
 りですか。私は此度私共本國の店から派遣せられて参りましたの
 で、當地の商業の状況を視察し、然る後に歸りまして、其の上で將來何の
 商賣を始めるかを相談するのです。左様ですか、それでは汝は幾日
 程滞在して御歸りになる御積りですか。ほんの三個月許の間です。
 今後、若し何か商賣の事を御尋ねになりたければ、私に二人の懇意

至好の
至ッテ入魂ナル
給
汝ノ爲ニ

上同
先般、過般
道邊
此度、此大
何故
何故
如此
原
皆因
只……ノ爲ニ
上秋
初秋
還是
ヤハリ
附望
希望
超然
念イテ、念ニ

な友人がありましたして商業界の情況は、先づ略ぼ承知して居ます、汝が彼等に御面會を望めますならば、私は御紹介を致しませう。至極結構です、今後私は御尋ねせねばならぬ事が有らうと存じます。

第二章

汝此間、今度は五六個月滞在しなければならぬと言はれたではありませぬか、何故此様に早く又御歸りになるのですか。私は元は永らく逗留しなければならぬといふ積りでしたが、只だ此度私共の店から電報が参りまして、緊要な事件の相談があるから急ぎ歸れとの事ですから、早く歸らなければならぬのです。それでは、復た御來になるのは、何時になりますか。只今から確と言ふとは出来ませぬ、若し私が歸つて、只相談事を爲す計りならば、大抵秋の初には復た來ることになりませうが、若も店で私を他の國へ派出する積であるならば、それはまあ來ることは出来ませぬ。私共は、矢張汝が早く又御來になることを望みます。私も矢張、又來ることを望みますが、私の思はく通りにな

由得我
自分ノ思ヒ通り
想
忘レズニ

招
募集
股份
株式
准
許可

頭目分
洋法
新式
土法
株式
開採
開掘

るかならぬかは分りませぬ。どうぞ、汝御忘れなく、御手紙を下さいませ。

第三章

御親類の方が株券を募つて鑛山を御開掘になる事は、少しは目鼻が付きましたか。全く爲れは爲る程だめです。それは役所が許るしませぬか。元來役所から開掘する人を募つたのです、何うして許さぬことがありませう。左様でなければ、或は株式の募集が難しいのですか。株も固より容易く募集は出来ませぬが、併し只其の爲ばかりではないです、私が聞きましたには、彼等の彼の數人の重立つた人等が、洋式で開掘しやうといふ者もあり、舊式で開掘しやうと望む者もあつて、意見が悉く一致しない、其故一時取極める事が出来ないので、多分株券も未募らないのでせう。方法が未相談の調はないのに、何うして株券を募れませうか。

第四章

行市
相場
長
落
下落
用項
太
往長
毛
十錢ナリ

話
手紙ナリ

近來金の相場は如何ですか。先づ矢張昂るばかりで、下りますまい。先頃は金の値段の少し下落したさうではありませぬか。先頃下落しましたのは僅かです、此頃又昂りました。私の考へでは、金の値段が下落するとゆうことは、何うしても困難だらうと思ひます。左様です、當時は各國共都て金を用ゐる國が多くて、銀の用途は大變狭い、其故銀の値段はどうしても容易に昂りませぬ。若も世界の各國が都て金を使用したならば彼の銀といふものは無用の物になりはしましまいか。つまり銀では彼の五十錢の銀貨や、十錢二十錢の貨幣を鑄するばかりです。只銀では其等の貨幣のみを造るとしたならば、其の用途はほんの狭いものですな。全く左様です。

第五章

私の二人の友人が、數部の會話書を買ひたいと言つて居りますが、私は天津に有るか、又は上海に有るか知らないのです、私が思ひますに、汝は屹度何處に有るか御存じでせう、どうか私に御話し下さい、私は手紙を

靠得住
信頼スベキ
省
手紙ナリ
敢白
マア本當ニ
意、定ニ也
労働
君ヲ煩ス
寄來
送り來ル
開
仕切書ヲ出ス

認めて友人に買つて呉れるやうに言つて遣るに好都合ですから。汝支那語の會話書を御買ひになりたいのならば、何も面倒なことはありませぬ、汝は手紙を天津や、上海に送つて御友達に頼んで御尋合せになるに及びませぬ、其の支那語の會話の書物は、日本の東京の神田區や本郷區の彼の多くの本屋には皆有ります、東京の方には慥な友人がおりますから、私は手紙を書いて友人に近頃新に出來た必要な會話書を汝の爲に數部買つて送つて呉れるやうに頼んで遣りませう、一層手数が省けて確かではありませぬか。其はまゝ寔に結構です、只汝に御厄介を掛けまして、私は眞に相済みませぬ。これ位の事が何ですか、何も面倒な事は有りませぬ。それでは、其の本代はどう致しませうか。それは急ぎませぬ、書物を送越す時に屹度書付を寄越しませうから、何程であるか値段が知れませぬ、其の上で汝は私に御渡し下さい、而して送つて遣るが宜いではありませぬか。左様ですか、それでは仰に従つて置きます。

印字的機器
印刷機械

那處、彼方
人地生疎
一切不案内

照應
世話

能辦
精明、利口

不似
音ニ……パカ
リテナク
聯屬

第六章

私は來月一度日本へ往かうと思ひます、又私共の學校に印刷機械を買入れたいので、買入方を頼まれました、私は今度初めて彼處に参りますので、人情地理共不案内で、其の上言語も通じませぬ、若も彼處に堅い御友達がありませぬならば、どうか紹介状を一封御認め下さいまして、私の世話を頼んで遣つて下さいませぬか。好しい、私は一人至つて心易い友人が有ります、其の人は東京本郷區で一軒の書林を開いて、専ら漢籍を賣つて居ます、汝東京へ御出になりましたならば、印刷機械買入の事を其の人に御相談なさいませ。左様致しませう、其の人の店に印刷機械も賣つて居ますか。其の人の店には印刷機械は賣つて居ませぬが、併し私は其の人が買入の事を扱ひ得ると信じます、只此ばかりでなくたとへ他の事でも其の人は扱ひ得ます、物事に明い人で各商店とも皆連絡を有して居ますから、何事も其の人に御頼みになるが一番大丈夫です。至極好い都合です、其の御友達に吾々共の國の語は解

一口的
味が皆トノ意
數一數二
一二三數ヘル
切實
確固ナル

倒
誤ノ意上聲ニ讀
字號
屋號
相好的
懇意ナ人
本主兒
元ノ主人

照管
世話管理
寫的
書イタノハノ意
即書面ニ認メ
タハトノ意

第七章

其の人は九で北京語です、當時日本の商人中でも、其の人の北京語は、一二に數へられます。其は眞に愉快です、左様な人を得るのは何といふ仕合でせう、どうか汝一封御懇書を御認め下さいませ。一切承知しました。

汝の彼の店は譲受られて、何故屋號を換へられないのか。私の彼の店は譲受けたのではありませぬ、借受けたのです、何うして屋號を改められませう。誰に借られたのか。矢張私の或る心易い人の店です。何故元の主人は商賣をせず、店を汝に貸したのだらうか。全く元の主人は好い事が有つて他處に行き、家には商賣を管理する人がないのですから、そこで私に貸して呉れたのです。御借りになつたのは幾年と取極められたのか。五年間の契約です。何故汝其の時に、其の人と相談をして譲受られなかつたのか。私は其の當時、其の人の口振を探つて見ましたが、彼は讓渡することを承知せぬやう

爲甚麼ニ
何故ニ
一定的
定ツタ
未暇
得意

外頭
不大好
穿換
取引ノアル
叫不響
呼ベトモ應セザ
ル意、注文ニ應
セサル意ナリ
弄得
扱ヒ方
精
疵物又ハ屑ノ意
ヨリ轉シテ實效
ノ意ニ用フ
早就
決ニ
頂不住
頂ハ相當ノ意
當セザル意

欠項
欠ハ掛借ノ意
ハ高、額ナドノ
花
空、損チ爲ス
打官
同、訴訟提起
亂子
騒動、混亂

貴銀行
電匯
電信爲換
潮水
爲換手数料
按符
據リノテ意

單
只
分行
支店

でした彼の意見では、他處から歸つて來た上は、自分に又受繼いで商賣
をしようといふ様子です。彼の其の店の評判は如何ですか。其の
店の評判は、随分有名なもので、諸處に常得意があります、其故彼は讓渡
を承諾させぬ。 成程

第八章

近頃洪順號は世間の評判が餘り好くない店で取引のある各商店が皆
取引に應じない、どうして此の様に衰微に立至つたのでせう。私が
去年一度言つたことがあるが、御記憶がありませんか、彼れの店は一二
年の内に屹度没落します、私は疾に彼の店に有る丈の貨物は決して他
で借りになつて居る程は無いといふとを知つて居ました、果して此度
の風評が立ちました。私が想ふのに彼の店は、大抵番頭の彼の親戚
の人達が事を壞つたのでせう。正さに彼の人等からです、彼の親戚
達が店に這入つてから彼の好い手代等も皆續々暇を取つたので、彼の
親戚達は勝手氣儘に金を使つて、商賣に損を來した、有らゆる借金も差

引勘定も今後は仕拂が出来ぬから何れ訴訟を提起するのでせう、斯る
騒動はやはり番頭の責任ではありませぬ。彼の信用した親戚が仕
損じたので、彼自身の不明を怨んで他人を怨むことは出来ませぬ。

第九章

私は一千圓の金を御店から電報爲替で天津へ送りたい積りですが、如
何程手数料が要りますか。外國への電報爲替は都て手数料は要り
ませぬ、其は爲替を送るのではなく、其の日の相場に據つて、汝に賣つて
御上げ申すやうなものです。左様ですか、分りました、それでは私は
一千圓の電報爲換が買ひたいのですが、何程日本の紙幣が要りますか。
汝は天津の電報爲換を御買になるのではありませぬか。左様です。
私は今日の相場に據つて計算を爲て見ましたが、一割五分五厘減りま
す、汝八百四十五圓丈御渡し下さらば、それで好しい、併し汝は別に電報
料を御渡し下さらなければなりません。汝の言はれる、其の電報料
とは、汝の店から、天津の支店へ打たれる、電信の入費ではありませぬか。

花
入
知
會
令
友
女
ヲ
シ
テ
知
ラ
シ
ム

立
刻
時
即
時

貸
分
行
御
支
店

認
得
見
知
リ
タ
ル

並
決
シ
テ
之
意

累
計
手
數
而
倒
難
儀

法
子
方
法
手
段

好
辦
取
計
ト
易
キ

それなのです。それでは天津の私の彼の友人が何うして私が彼に電報爲換で金を送つたことを知りますか。それは汝が別に電報を打つて御友人に御報知になつて、其の方に天津銀行へ其の金を受取りに行つて貰ふやうにしなければなりません。若も私の其の友人が私の電報を受取つて、御支店に金を受取に行つたならば、直に其の人に御渡しになりますか。若も私共の店で、其の御友人を存じて居れば、無論即時に其の方に拂渡しますが、若も御友人を存じて居ないといふ事であつたならば、保證人を立てられるが宜しい、さすれば直に受取れます、それは決して何も面倒な事はありません。

第十章

私は日本の紙幣五百圓を、北京へ爲替で送りたいと思ひますが、どうか汝爲換で送る方法を御考へ下さいませぬか。それは容易い事です。此の東京に一軒第百銀行といふのがありまして、北京に一軒分店があります、其の屋號は貯藏銀行といひます、私も第百銀行から、北京へ爲換

可
不
知
道
未
知
知
ラ
ズ

銀
子
銀
兩
ノ
コ
ト

傷
耗
鉄
損
減
額

溢
出
餘
分

滙
兌
爲
換
取
組

扣
分
引

有
限
億
カ
ト
云
フ
意

道
就
コ
レ
カ
ラ
直
ク

綢
緞
舖
會
吳
服
店
能
ノ
意

で金を送つたところがありません、汝の其の金も彼の銀行から爲換で送られるのが尤も慥かです、併し汝は北京で銀が御入用なのですか、又は墨西哥、弗が御入用なのですか。私の考は銀が欲しいのですが、併し此の金を北京へ爲換で送れば、何程か減じますか。只今金の値段は大層高うございますから、減額しないばかりでなく、大抵尙數兩餘分に出ませう、此は元來爲換取組を爲る譯ではなくて、汝が金貨で銀を御買ひになる事なのです、其故却て數兩多く得られるのです。成程、それは銀行では、少しの爲換打歩も引かないのですか。少し引きませ、それは寔に聊かです。左様ですか、それでは、あなたに御配慮を願ひます、どうか、私の爲に御取計下さい。どう致しまして、私は今直に行つて取計ひませう。

第十一章

彼の祥隆吳服店の朱番頭は、彼の商賣柄の人物ではないけれども、併し一種上手に手代を使ふ、此の一兩年營業向は一年増して景氣が好く、此

一成
莫非……
收買
財東
資本主
移ノ意
古ク仕入タル品
別ト同シ
増資
仕入レル也
搭
組合

底
内幕
信用

増盛の彼の店は見切賣を爲て、各種の物都て一割引で賣出すさうです、
店を仕舞はうとするのではありませんか。店を仕舞はうとする
のではありませんか、又金主と組み、場所を換へて、商賣を始めやうとして
居るのです。既に場所を選定しましたか。西單牌樓で、場所を見
出したさうです、今度舊い代物を値下げして賣り飛ばし、新資本主と別
に商賣を始め、新たに貨物を仕入れるのです。私は彼の増盛店の范
番頭は上手な商賣人ではないと想ひますが、何故又金を持ち出して、彼
と組合つて店を始めやうといふ人が有るのでせうか。あなたは御
存知ありませんか、増盛の彼の店は地方の取引が大層廣く、總て西北の
陝西、甘肅、蒙古などの地方から、北京に來て代物を仕入れる客人は、半分
以上彼の店の代物を買入れます、今度の新資本主は彼の以前の友人で、
深く彼の店の内幕を知つて居るので、夫故彼と組合ふことを承諾したの
です。成程それでは、屋號は換えますか。屋號は換えませぬ、矢張
彼の元の屋號を用ゐます、若も屋號を換ゆれば、地方の客人が却て信用

打發
道ハス意
樓
貨物置場

補助
散學
不規則ニ學ブ

不差甚
單大
洋書付
洋布片
洋金巾
洋帶
洋襪
洋傘
洋火
洋燭
洋力
洋傘
洋燭
洋力
洋傘
洋燭
洋力

しませぬから。

第十四章

私は森和商店の陳様が私に此の手紙を持たせて、汝に御目に懸りに出
されました。おまへの苗字は何といふか。私姓は蘇、名は保安と
申します。おまへは何處の店で、倉庫を管理したことが有るか。
私は元森和商店で倉庫の管理を補助して居ました。おまへの英語
は何うして習つたのか。私は只自分で習ひ覺えたのです。それ
では荷物の揚卸しや、税關の届け、納税などの英語は大抵おまへは談せ
るか。能く談せるとは言へませぬが、大抵言ふことが出来る位のと
です。此等の事は、おまへは皆仕馴れて居るだらうな。此の數
年間で先づ多少仕馴れた積りです。其の貨物の名を英語で皆言ふ
ことが出来るか。大抵不斷見て居る貨物は、皆言ふことが出来ます。
それでは、おまへにこの書付は一體何の貨物か。はい、これは阿
片、金巾、昆布、鍼力、摺附木、蝙蝠傘、藥種、時計、砂糖、茶、これだけの貨物です。

工賃
給金
君一君
試ニ見テク
好ノ意
如何ガテス

違ひなし、それではおまへは一ヶ月何程給金が欲しい積りか。私の考
は、給金は先に御極めを願ひませず、私が参りまして一ヶ月間御覽下さ
いまして、其の上で汝が私に給金を御極め下さいませ、なんと如何でし
よう。それも好い、それでは明日直ぐ来るがよい。はい畏りまし
た。

第十五章

批
注文

多
何時
含糊
曖昧

昨日来た此の船で、私共の注文してある貨物は著しませぬでしたか。
参りました此の船には、御注文の貨物は有りませぬ。それでは、何の
船が来れば、私共の貨物があるのですか。それは海順といふ船が着
すれば、汝の荷物があります。其の海順といふ船は何日でなければ
著きませぬか。大抵此の月内には是非著しませう。汝の其の御
話も、まだ少し曖昧です、御互取交した賣買契約書面の日限に據れば、既
に十日遅れて居ります、今に成つて尙著する日が極らない、私の店では
何と始末を著けませうか。彼の買賣契約書は豫定に過ぎないです、

批
注文シテ相互ニ
取交サルル契約
證書チイフ

字
證書、証文

若
念
アセル

汝若も只賣買契約書面の期日に據つて御談しになるのは、それは餘り
酷に過ぎると言はねばなりません。それは何を言はれるのです、
賣買契約書に據つて談判しなければ、それでは最初結んだ此の賣買契
約書は何になります、諺に口は風のやうな物、筆は足跡のやうだといひ
ます、口約は無證據となるを恐れて、そこで此の証文を立てたのです、そ
れに何故私が酷ですか。御尤、汝御心配には及びませぬ、今日も經
つたならば、荷物は到着しませう。屹度です、若も十日經つて若か
なかつたならば、汝は私の要求に應じなければなりません。好し
い、若も到着しないといふことであれば、私は汝の要求に應じませう。

第十六章

不
愉快

偏
偏見
生憎
生氣
立腹

昨日高根村は汝の處から歸つて、甚不愉快に感じて居つた、彼の人の談
に彼の人は自分の荷物が著いたかを尋ねに来た所が、荷物は未だ着い
て居ないので、彼は心中已に急ぎ立つて居る處へ、生憎又汝が彼に少し
酷だと言はれたので、彼は一層腹を立てたのです、汝は彼の人の氣質を

脚氣、性質
向來、性
從來

火輪船
汽船

引出
引分若クハ引出
ス意、都合チス

準
必定
願意
希望
管保
保證ス
回頭
後刻

把道厨
此ノ事チ、又其
ノ事チノ意

老兄
貴兄ト云フ意
兄弟
自分チ推稱シテ
曰フコト
同事
同僚濟輩

枕木
枕木
一ニ……二ニ
一ツ……二ツ

様子
見本、雛形

御存じありませぬが、彼の人とは從來他人と引合をするに、言ふた事は必ず仕遂げます、人が若も彼と引合をするにも、矢張左様でなければなりません、若も偶然彼と談話をして、少しでも談が齟齬したならば、彼は直に急ぎ立つて来るのです。これも決して私は承知で談を齟齬さしたのではありませぬ、併し汽船が着きませぬから、私は何と仕方がありませぬ。汝は私の御談しする其の所以を御聴きなさいませ、彼れが汝の方で極めた彼の貨物に彼れが今急に賣りたがつて居るのは金巾です、汝の方には、金巾が澤山御貯になつて居るではありませぬか、汝は取敢へず彼の人に十箱の金巾を融通して御遣りになり、彼れに先に賣らせたならば、彼れの心は彼の様に急立つことはありませぬ、彼れの注文した金巾が著いた上で、十箱歸せば同様ではありませぬか。左様爲ても好しい、汝の御考へでは、先づ十箱の金巾を融通して遣れば、彼れは屹度承諾しますか。私が受合ひします、彼れは屹度承諾します、私は後程彼れの店に行つてから、此の事を談し、彼れに人を差出して十箱

の金巾を取りに来るやうに致しませう。至極結構です、それでは御足勞を願ひます。 どう致しまして。

第十七章

私は貴兄に御相談申したい事が有つて参りました。何事の御相談ですか。目下私共の会社の評議で、當地から某處への彼の枝線を敷設せねばならぬ、一兩日前に總理鐵路大臣は、此の事件を私と私共の同僚の周子通とに委任せられまして、私等兩人で引受くることになりまして、私等二人の考へでは、都て鐵道敷設用の鐵軌や枕木は、皆御店に依頼して、私共に代つて買入を願ひたいのですが、貴兄は私等の爲に、扱つて下さいますか如何でしょう。それは何も御承諾しないといふ事はありませぬ、第一此れは私共の店で爲すべき商賣であり、第二には御互又御懇意な間柄であり、其の上私共は御國の他の處へも豫て此の鐵軌や枕木を扱つたことがありますから、此の事は私が屹度十分に骨を折ります。寔に御配慮を煩します、而して今御店に此の鐵軌と枕木と

宮督商辦
監督官之ヲ
ハ人民ニ任ス
總理、頭取
副總理、副頭取
株主
公具保結
公ニ保証スル

定局
時ノ限マリタル

一宗
一種
遺
建築スル

組織では各商家は皆入株を望みませぬ、其故此の事は中止の姿になり
ました、此節聞きますのに各商家は自分に株を募つて、一個の銀行を私
立し、都て銀行内の頭取、副頭取等の役員皆株主の中から公平で正直で、
商業に馴れた人々の信用する人を推選して、之に任することに爲て、議
が整ふたる後、數軒の大鹽商と、多くの富豪紳士とが役所に連署の保證
書を差出して、若も後日其の銀行に、缺損金を生ずるか、預り金を使ひ込
む等の弊が出来たならば、都て保證人連より賠償し、併し平常の取引
上等には、官から吏員を派出して經理するに及ばないと、略ぼ商議の目
鼻が付きかけたさうですが、果して何日頃決定の場合に立至るかは分
りませぬ。

第二十章

御國の東京には、一種の商賣をする場所があつて、勸工場といふさうで
すが、それは何んな仕組みですか。其の勸工場は個様なる組織です、
或一人が一個處の廣大なる家を建てまして、前後二つの口を設け、一は

不
許サズ

退還
ス

貸
借

古玩
竹董

入口、一は出口とし、其の家の内は又澤山の間切を拵へ、家主は種々なる
賤しからぬ商賣を招いて、其の屋内に代物を排へて商はせ、毎商賣に一
區を占めさせ、但し一軒には一種の商賣を許るし、二種の商賣を兼ねる
ことは許さない、場處を借りて商賣するものは、一通の借地證書を入れ
なければならぬので、其の證書は一年に一度書き換ゆるのです、證書
面は一年何程の借賃と、都て證書に書かなければなりません、若も其の
内で商賣することを望まず、場處を戻したくば、矢張證書書換の時にな
つて戻すことが出来るのです、都て其の勸工場に行きてぶらつくなり、
物を買ふには、皆入口から這入つて、出口から出るのです。左様です
か、其の内の場處の借賃は都て同様ですか。都て一樣には参りませ
ぬ、其の入口の場處を望は、借賃が少し高く、片隅の方等は借賃が少し安
うございます。成程併し其の勸工場には全體何の様な代物を賣つ
て居ますか。賣つて居る代物は色々あります、平生使う銅、鐵、木具、瀬
戸物、又各種の家具のやうな物や、又衣類、絹物、夜具、一切の敷物等から、又

何故デス
打算ツモリ、心組
已經スデニスデニ也
有ハヤト譯ス
有子一個ナリ或也
住家
住下
以テ……スベシ
ニテ口語ニテハ
ナド、釋スベシ
下利、殘餘
包租、引受借ル
如數、通リ、悉ク
那層ノ段ハ、ソノ
房東主
借家賃
租目下、現今
妥ハ妥當ノ意即

チ程ロクホ成
ルチイフ
下利、同シ
招租人ヲ捜ス
那好、爲シ易シ
トノ意、常用語
也
告出ケ知ラス
勻引分ケ
找、尋也
住、借家人
ノ意
吊、一干文ナ吊トイ
フナリ
彷彿、ヤウダ
院、邸内、
地、
茶、
北京地方ノ俗
家、借入ル、際
必、主ノ召使
等、ニ與テ茶代是
チ、トイフ
中人、周旋人
我、私ノ手ニ入ル

を持つて居ます。何處ですか。此の北方の安福町に在るのです。幾間の家ですか。三十幾間あります。三十幾間もあつては餘り多く、私にはそれ丈住ひきれませぬ。汝が若も左様多くて住ひきれなければ、差當り先づ皆御借入れになつて、汝御自身の住はれる幾間かを除いて、残りの幾間かは別の人に復貸しをなさるが宜しうございませう。それでは私が借大家ですな。左様汝が借家主。私は皆借りはしますが、一時に復貸することが出来ずに、毎月家賃だけは自分で極通り家主に拂はなければぬかと心配します。其段は何も心配すべきことではなからうと思ひます、此節家を他人に貸付けるのは真に容易い事です。それでは私が借入れた後に自分の住まふ幾間かを除いて残りの幾間かは、やはり汝に借家人を捜すことを御願致します。それは御易い事です、汝が借受られる後に、何れだけの間敷を復貸しすると御極めになつて御知らせ下さい、私は汝に代つて借家人を捜してあげませう。それなれば至極結構です、併し一ヶ月幾何

程の屋賃か御存じですか。私の友人が申しましたには、毎月七十吊文の屋賃です。七十吊文といふ屋賃は餘り多い。汝がこの屋賃を聞かれたら多過ぎるやうでせうが、汝はその家の至極佳いことを御存じないからです、邸内も廣く位置も好く、大通りへも近く、買物をするにも甚便利です。それでは私がその家を借るには、やはり茶銭が要りますか。茶銭は無論要ります。何故私が汝の手から借りるのに、やはり茶銭を拂はねばならないのですか。汝が私の手から借りる家、別に中人はないのですけれども、結局この茶銭は御拂にならなければなりません、私が仔細に御談しますが、汝の御拂になるこの茶銭は、決して私の手に入るものでなく、又私の彼の友人の所得にもならないのです、其の友人の召使の者等に大勢で分配するのです。それでは幾割の茶銭ですか。屋賃と同額です。左様ですか、而して猶私は請人を立てなければならぬでせう。請人は無論要ります、汝は請人を拵へることが出来ますか。はい、私は請人を拵へること

底下人、小厮
 大家、皆ノ者
 一茶一房、皆ノ者
 例へハ七十吊錢
 ノ家賃ナラハ初
 月ニ別途ニ七十
 吊錢ヲ茶錢トシ
 テ支出スルチイ
 都、保人、大方
 全體、都テ、大方
 那、就、行、了、ア
 ノ、意、モ、アリ
 テ、ソ、レ、ナ、ラ、バ、ソ、レ
 テ、ロ、シ、イ
 準、見、必、ズ、再、見、セ、ム
 未、領、教、未、ダ、ホ、リ、マ、セ、ム
 承、リ、タ、シ、ノ、意、ヲ
 費、外、ニ、合、ム
 御、用、向、宣、吏、商
 買、テ、論、セ、ズ、一、般
 四、川、御、用、向、宣、吏、商
 北、河、正、陽、門、外
 東、岸、二、沿、河、地
 西、岸、二、沿、河、地
 行、情、ト、イ、フ、ナ、リ
 相、場、ト、イ、フ、ナ、リ

が出来ませす。 汝は全體如何なる身分の請人がありますか。 御望
 み次第で如何様な請人でもあります。 それは結構です、汝は何日其
 の家を見に行く御積りですか。 私は一兩日後に汝と御一所に行き
 たいと思つて居ます。 それでは私共一兩日以内に訖度御目にかゝり
 ませす。 は、二三日内に必ず御目にかゝります。

第二章

汝の御姓は。 痛み入りませす、私の姓は李、未汝の御姓を承りませぬが
 伺ひたう存じます。 私の姓は趙。 御處は何處ですか。 郷里は
 張家口です。 北京に御出になつたのは何ういふ御用向ですか。
 私は貨物を賣りに來たのです。 汝の賣りに御出でになつたのは何
 ういふ貨物ですか。 私の賣りに來たのは皮貨です。 汝は何處に
 御逗留ですか。 私は城外の旅館に泊つて居ます。 何といふ宿屋
 に御泊りですか。 西河岸の大成といふ旅館に泊つて居ます。 今
 年は皮貨の相場は如何ですか。 今年の皮貨の相場はまゝ普通です。

行市
 緣故、所以
 規、理、由、所、以
 販、不、足、寡、少
 販、貨、物、仕、入、レ、ル
 洋、貨、仕、入、レ、ル
 廣、東、西、洋、貨、ハ
 廣、東、ニ、テ、ハ、一、般
 一、ト、ハ、東、西、洋、貨
 六、廣、東、ノ、雜、貨、ヲ
 伊、フ
 雜、貨、問、屋
 置、來、仕、入、ル
 假、立、入、來、ル
 假、立、入、來、ル

數年前には皮貨の相場は大層高かつたと聞きました。 左様、數年前
 には皮貨の相場は大層騰貴して居ました。 何ういふ理由でせう。
 全く貨物が少なくなつたからです。 今度御持になつた貨物は皆御賣
 上になりましたか。 未皆賣切ませぬ。 汝皮貨を御賣上にならば、
 現金を持つて御歸りですか、又は貨物を仕入れて御歸りですか。 貨
 物を仕込んで歸ります。 全體何ういふ貨物を仕込んで御歸りです
 か。 皆西洋、又は廣東の雜貨のみです。 汝は張家口に店を御持ち
 ですか。 はい、店があります。 御屋號は。 益泰と申します。
 汝は從來御持歸へりの貨物は總て何處の貨物を御求めになりますか。
 それは別に定まつては居ませぬ、何處の貨物でも恰好でさへあれば、買
 ひませす。 さういふことならば、私の或友人が哈達門外で今度新に西
 洋と廣東の雜貨問屋を開きました、彼れは總て自身に廣東に行つて仕
 入れて來るのですから、直段が他の店よりも全く廉です、汝將來何を御
 買ひになるにも、彼れの店で御求めになります。 御友人の其の店の

底下、イツカ
一盞、一度

行啓
門除
出馬
往診、往寄支那
ノノニ
ニ騎リテ往診セ
スクイフナリ

累心
心配
忍苦者
訪問

號は何と申しますか。 徳發と申します。 それでは今後、私が其の
店舗に買物に行きましたら汝のことを申しましよう。 はい、何日か
私も一度御同道致しませう。 それは猶更結構です、伺ひますか、汝も
最初猶商賣をなされたことがありますか。 商賣を爲たことがあり
ます。 汝は全體何の商賣をなさいましたか。 私は薬舗を開いて
居ました。 城外でですか。 左様城外です。 その薬舗は今も
猶御開きになつて居ますか。 ありませぬ、閉ぢてからもう七八年に
なります。 それでは汝當今の御職業は。 私は只今醫者を爲て居
ります。 御醫者は御宅診ばかりですか、又往診もなさるのですか。
朝は宅診を爲て正午から往診を爲ます。 御醫者は如何しても商賣
を爲るよりもましでせう。 否、何も別に好いことはありませぬか、唯
商賣を爲る程の心配が無いばかりのことです。 御宅は何處ですか。
拙宅は東四牌樓の報房町です。 何れ他日は御宅へ御訪問に出ま
す。 痛み入ります、私も一兩日以内に御旅宿に御訪問致します。 恐

老弟
年長者が年少者
ニ對スル敬稱
味
元來滿洲語ヨリ
出テシ語ナリ、
返辭ナリ
也
値ノ意、茲ニテ
ハモウ直ニナド
ノ意ナリ
辭行
必願乞
連丁等
家眷等、連ハ後
置辭ノモ又ハマ
テモノ意
搭立ヲ行ク
招
捐官ナリ、
トハ人民士庶ヨ
リ捐資ヲ納レサ
セテ官職或ハ制
ナリ元ト國幣ノ

れ入ります、御閑暇の時分には私の旅宿に御入來下さい、御互に御談し
致しませう。 そお、それでは御互他日復御目に懸りませう。

第三章

汝御宅から御出になりましたか。 はい、宅から來ました。 汝は尙
御出立の日を御取極になりませぬか。 もう直この四五日中に出立
します、今日はそれが爲に態々汝に御暇乞に來ました。 それは實に
御丁寧に、汝今度は御家族も纏めて御出になるのですか。 左様です、
家族も皆纏めて行く積りです。 他人と連立つて御出になるのです
か、又は御一人で御出ですか。 他人と連立つて行くのです。 御連
の方も矢張官吏ですか。 官吏です、その人は新に通判の官を得て地
方へ候補に行くのです。 汝などは今度省に到着せられた上は、直に
就任せられるのでせう。 はい、省に到着した上は、大抵直に就任する
筈です。 汝の御就任なるに官は繁劇な御役目ですか。 繁劇な役
ではありませぬ、閑な役です。 當時、その役の代理事務を執つて居る

月十九、二十、二十三日、内ニ開印ノ期初
所全ク無シ、皆無
忙其儘
何テ御念ギニナ
不似事
禮儀ニカナハメ
道新喜
新年ノ賀チ旨ヲ
太守
知府ノ別稱
上司
貴科分
何年ノ試験ニ登
第セラレタカ
舉人
第ニ第セラル者ニ
與ヘラル
會試
五年毎ニ北京ニ
於テ各省ノ舉人
ヲ集メテ試験ス
之ヲトイフ
コノ試験ニ登第
スレバ進士ノ第
位ヲ授ケラル
連年ノ試験ニ合

私は昨日今度知府に御昇進なされたと承たまわり、それ故に今日は能
々御悦ヨロコビに來キました。痛み入ります、寔に御足勞でした。汝大抵何
日頃迄に赴任なさらねばならぬのですか。尙豫定が出来ないです、
如何しても上官から委員を派せられて交代の上、そこで引繼が出来
るのです。汝は引繼が濟みましたらば、直に新任地に御赴任なさるの
ですか、又は先づ省城へ御出にならなければならぬのですか。先
以て省城へ行かなければならないのです。伺ひますが貴兄は何年
の御及第です。私は辛酉年の舉人です。會試は何年に御登第で
したか。會試は壬戌の年でした。元來貴兄は連年の及第、眞に才
能の勝れ方が甚だしい。御褒過に與かりました、たゞ一時の僥倖に
過ぎないのです。貴兄御謙遜に過ぎます、伺ひますが、貴兄の官邊の
御履歴は。私は一任期上元縣の知縣を勤め、其後任期满ちて、前任の
巡撫閣下の推舉で現職に昇任しましたが、數年以來今に寸効だも立て
得ず、眞に慚愧に堪へませぬ。どう致しまして、貴兄の如き大才では

格スルチイフ
微俸
太僕
一任
上元縣
江蘇省江寧府ノ
管轄ニ屬スル縣
俸滿
三年サ一任期ト
ス
上游器重
ンズ
百姓ノ人民、黎民
行期有日
登程ノ日ガ極ラ
當不起
意痛ミ入りマスノ
檢拾也
無賴漢、惡徒
何カ爲ニ、何故
爲其儘
打強奪
槍去
強奪

上官が器量を見て拔擢せられるのも道理です、その上人民を愛せられ
るとが子のやうになさいますから、今度知府に御昇進になつたのは、寔
に彼處の人民の幸福です。眞に痛み入ります。いづれ御出發の
日が極まりましたならば、私も御見送に出ます。それは實に恐縮で
す、甚だ御足勞を掛ました、他日私は改めて御役所へ御答禮に出ます。
痛み入ります。

第六章

私は數日前の夜數人の者が、東街の或銀行へ強奪に參つたと聞きまし
たが、其の様な事が有つたのですか。銀行へ強奪に行つたのではあ
りませぬ、銀行と喧嘩を爲て居たのです。何うして喧嘩を爲たので
せうか。其の理由は一人の無賴漢が一枚の銀行手形を拾つて、銀行
へ金を取りに行つた、銀行員の言ふには、これは一枚の遺失手形で、既に
或人から紛失届があつたのだ、汝は暫時待つて居なさい、私共は其の手
形を遺失した當人と呼んで來ます、汝方二人面談なされば、其人も汝に

筆筒
 印色盆子
 燻肉池
 合式手燭
 式ニ合フ意、茲
 ニハ氣ニ入ルト
 照樣兒
 見本ニ照シ見本
 後門
 濟國皇城ノ後門
 ナリ地安門トイ
 フ
 先頭裏
 以前、從來
 公館
 公使館又ハソノ
 他ノ官署井ニ大
 官ノ旅館ナド軌
 レニモ通ズ茲ニ
 テハ公使館ナル
 ベシ、
 四ニ百フ道台以
 上大官ノ旅館ハ
 例令一様ノ宿泊
 ニ充テラレソ宿
 館ヲモ猶公館ト
 イフナリ
 失陪
 告別ノ辭也

三十六
 るのだが、この様な花瓶で、何圓しますか。この一對で百圓餘かかります。おまへの處に何か小さなものはないか。汝の御尋になるのは如何様な小道具ですか。たとへば何か小さな筆立か、小さな肉池か、小さな手燭のやうな類さ。汝の仰のそれ等の物は現今作つては、ありませんが、尙焼け上つて居ませぬ。それでは何時頃ならば焼けるか。四五日経ば焼け上ります。それ等の物が焼け上つたならばおまへは種々持つて來なさい、そうしておまへ方の店にある、その一對の花瓶の見本をも持つて來なさい、私が見て若も氣に入つたら、同様なのを一對眺へることにするから。はい、持參致します。おまへ方の店は何處に在るのか。私共の店は後門大街に在ります。屋號は。廣成といひます。おまへ方は從來にこの公使館に來て物を賣つたことがあるか。私共は從來、ここへは物を賣りに參りましたとはありません。この花瓶は、私は氣に入らない大き過ぎるから、汝は持つて歸りなさい。はい、私は御暇致します。御歸りか。

第八章

就
 就ハ直ニ也、提
 ハ百ヒ出スコト
 ココニテハ取次
 ノ口上ニハノ意
 彼此被此
 御互様

出了邊外
 出口
 長城外ニ出ツル
 ナイフ
 頃
 百畝チ一頃トイ
 フ日本ノ六町餘
 ニ相當ス而シテ
 一頃トハ二百四
 十号チイヒ一四
 トハ五尺平方ノ
 地積チイフ
 菜園子
 野菜島
 等
 金ヲ要ス

御主人は御在宅ですか。はい、在宅です。汝は奥に入つて御主人に取次をして下さい、私は後門に住んで居る徐といふ者で、御主人に遇ふて御話したいことがあるからと。畏りました。主人が、どうぞ御入りを、書齋へ御通り下さいませ。御無沙汰を。御互様に。此頃は御機嫌は如何ですか。無事です、汝も御機嫌宜しく。御蔭様で。御同前此頃中、遇はなかつたが、汝は何處へか行きましたか。仰の通り、私は一寸旅行をしました。何處へ行かれたか。長城外へ地代を取立てに行きました。左様でしたか。貴下、私は今日汝に御相談したいことがあつて、能々來ました。それは何事ですか。私の或る朋友で、その人は都の西に住んで居ます、彼は數頃の土地と、一個所の果物園と、一個所の野菜島とがあります、彼は只今金が要るとして、私に彼の地面と島とを賣入れて呉れと依頼されました、それ故私は汝に御尋に來ましたが、若も貴方が賣に取る思召ならば、御周旋を致し

願意、望ム
置是、又ハ也
佃戸、小作人
漢不出來、集メ
ルコトが出来メ

遺層
段ハ、ソノ

放下、補任
外任、補任
地方官

約扱、大概、
地契、土地所有
ノ券狀

ませう。その地所は、現在自身に耕作して居るのか、又は小作人に耕作させて居るのですか。そは彼れ自身で耕作して居ます。彼は何程で質入をしたのでせう。彼は一千兩で質入をしたのです。彼れもし一千兩で質入をしたいとならば、私は多分夫れ丈は融通が付かぬ。それでは汝は何程御融通がなりますか。若も六七百兩の取集なら出来るだろう。その點は猶一應私が回つてから當人と相談します。併し、その人は、何個年質に置く積りだ。この點は私も彼に尋ねましたが、彼が言ふには、何個年の質とは書かずに、金策が出来次第受戻すと書けば宜いとのことでした。幾年の質と書かないのは、結局宣布ない、その所以は近年中に若も私が地方官に任せられることがあれば、私は直にこの金が無くてはならぬ、それ故如何しても幾年の質入と明記した方が宜しい。はい、それでは私が又彼と相談を致しませう、汝は大抵今後何年程で、地方へ出役になられますか。私の心積りでは、尙五六年過ぎなくてはなるまい。私の考へでは五六

紅契、朱印ノアル
白契、朱印ナク個
人同ノ讓受渡ノ
証書

切實の保
確實ナル保證
爲シ能フノ意
憑、任也、特
也

年と書くことを彼に相談すれば、彼も又、何も異存はありませぬ。地券があるはず、汝は皆御覽になつたか。皆見ました。紅契と白契とは幾枚です。紅契白契二枚づゝです。それでは汝直ぐ歸つて彼と相談に御出なさい、彼れ若もこれだけの金額で、五六年と書くことを承知すれば、我れ直ぐに着手する。この事が極まる場合には、汝はやはり前に地所を一度御覽にならなければなりません。その事は、斯様じや、汝が若も確實なる保證を出すこの事は、決して間違いないと引合つて下さるならば、私は何も前以て土地を見に行かなくとも宜しい。この事は決して間違はありませぬ、それは私が慥なる保證を爲します。さういふ事ならば、私は汝の一言を信用します、この事が手數濟の上で、私が改めて彼れと同道して實地見分に行くことに爲ませう。

第九章

檀那に申上げます、大恒布店の徐番頭が見えまして、汝に御目にかゝつ

銀行 兩替屋、錢舖ニ
通達 同シ
了然 練
事務ヲ扱フ
開市 道喜
悦ヲ述テ
不伽 北京ノ俗語ニシ
テ然ナサバハル意
助字 不ハ、否也伽ハ

木匠 大工
師傳 所謂師匠ナリ今
棟梁ト稱ス
道中 此頃中

此の屋號は至極好い、この兩替屋の商法には汝も御經驗がありますか。その兩替屋の商賣は私は不案内です、私の姪が學んだのが兩替屋なのです、私は彼を店に置いて、仕事を扱はせる積りです。それは却て安全で、何日御開店の御積りですか。どうで來月初旬に漸く開店が出來ませう。御開店になりましたら、私は御悦に出ます。恐れ入ります、私はもう御暇致します。何を御急ぎですか、もつと御寛となさいませ。いや、私は尙店に用がありますから。あの金は明晩御店へ御届け致しますか。どうか宣布。汝御歸りですか。御入り下さる。

第十章

檀那に申し上げます、大工の劉さんが汝に御面會がしたいとて見えました。通せ。劉棟梁、主人が通りなさいと。檀那御機嫌能う御座います。有難う、おまへも無事か。無事で御座います。如何して此頃は一向見受なかつたのか。私は一寸國へ歸つて居ました。

年頭兒 八分作
作物ノ稔發
八分作
打 收得セルカ、
ハ動詞トシテ種
々ノ場合ニ用ヒ
合ニヨリ譯語異
リ
石 二斛チ一石トイ
フ凡ソ日本ノ五
斗六升弱ニ當ル
根 應 活ハ工事也應答
ハ受付クコトイフ
又ハ有付クトイフ
場合モアルナリ
主人 推舉、トリモツ
家ヲ建ツ
包 受負
不伽 音ニ……ノミナ
ラズノ意

何の用で歸つたのか。歸つて作物の收穫に参りました。今年汝方の地方は作柄は如何だ。八分作でした。汝は幾畝の地を作つて居るのか。私は一頃餘の地を作つて居ります。今年は何石の穀物を收れたか。本年は百石の穀物を收穫しました。汝は今度歸つて來て、何か仕事を受負ふたか。未だ仕事を受負ひませぬ、私が今日御目通りに來ましたは、一個處仕事があります、私は受負たいのです、併し口入人がないものですから、私は汝に推舉を願ひたいのです。おまへは何處の仕事を受負ひたいのか。西城の江檀那の處に家を立てられるではありませんか、私はその仕事を受負たいのです。私が聞ひたのに江様は幾人かに見せられたと、併し誰れか受負ひが纏まつたか知らない。如何にも、私の聞きましたには、三人見まして、二人は八千兩要るといひ、一人は七千五百兩かゝるといひましたが、江檀那は皆氣に入らぬとて、どれも尙極りませぬ。それでは若もおまへがあの仕事を受負ふには無論別人よりも幾何程か廉のか。それは無

不能合欄

可有一層

但有一節之意

契約書

禁辦的起度

自己ノ金ニテ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

取掛リ得ルカ

論です、私が若もあの工事を受負ひましたならば、別人より數百兩廉價ばかりでなく仕事は必丈夫にして、少しも曖昧なことは致しませぬ。私は汝の爲に話をしてやる事は容易い事だが、こゝに一つ、私が聞いて居る事がある、江様の意見は相談が調ふた上、契約書を取交す時分に、先づ半金を渡し、残りの半額は必ず工事の竣つた後でなくては渡さない積りなのだ、汝はそれで立換へをして置くことが出来るのか。はい、私も先きには半金より受取れないと承知して居ます、十分見積りを立てました、立換へることが出来ず、それは私の或朋友が瓦屋をして居まして、如何程煉瓦や瓦を用ひましても、その者が供給して呉れ、現金拂で拂ふには及ばず、工事が竣つた後、拂つて宜いのです、又妻の弟が材木屋を開いて居ますが、その者が貯はへて居る材木は澤山ですから、私は勝手に使ふとが出来て、矢張現金で拂はなくとも宜いのです、私が此の半金を受取るのは、それは石を買つたり、石灰を買つたり、皆の者に賃金を支拂ふ丈ですから、篤と勘定しましたが、大概それで足りさうです。

工錢
不若其度
大抵ノ意
後足ル也
明後日

第十一章

さういふとなら至極都合だ、明日にでも直ぐ江様に遇ひに行つておまへのとを能く話してやらう。それでは御心配を願ひます、私は何時御返事を伺ひに來ませう。おまへは明後日返事を聞きに來なさい。畏まりました、それでは私御暇致します。そう歸るのか。

汝何時頃御入來でした。私は先刻一度來ました、承たまわりますに、汝は御留守でした、そこで私は又外へ行つて、今方歸つて來まして、復た、彼等に尋ねましたら、まだ御歸りにならぬとのことでしたから、私は此處にじつと御歸りを御待ち申しました。それは御待たせ申しました。どう致しまして、汝は何處へ御出になりましたか。私は城外に行まして、耕作地に行き見物しました。當今の作物は總へて延びましたでせう。はい、皆な長くなりました。それでは今年の收穫は見込が有りますな。今の様子で見れば、今年は屹度豊作でせう。汝田舎の方に行かれて、百姓等の仕事をして居るのを御覽でしたか。

响飯 中食、夜食
一木、一株
午天、一時
會子、暫ク
放野ク
遊遊也、フツ
ワ少キ
聞得也
退宿ニ堪ヘキ
睡物難事也
午睡

其縁故
如何ナル理由
挑唆
オゲテ、教唆
親戚、朋友

はい私の行つた時に彼等は丁度畠地を鋤いて居ました、正午になつたら彼等は皆回へつて晝飯を喫へに行きました、そこで私は一の大樹を見着けて樹の下で暫らく涼すみ、牛や羊飼ひを眺め、十分涼しくなり、それからしばらく歸つて来た所です。汝こそ眞に高尙な御樂みをなさいます。何が高尙ですものか、唯内に居つても退屈であり、午睡をして起きると気分が宜くないですから、寧ろ出掛てぶらつく方が可からうと思つてのことです。汝それこそ御養生になります。どう致しまして、汝今日拙宅へ御入來下されたは、何にか御話があるのですか。私は一の困難な事がありました、汝に處置を願はうと存じて参りました。それは何事ですか。それは私の弟が今度突然分家したいと申す事です。汝方兄弟は平生大層睦しくして居らるではありませんか、何故に令弟が突然分家がしたくなつたのでせう。私も如何いふ理由か存じませぬが、多分彼れは大方他人の教唆を受けて、それで遂に分家がしたいといふのでせう。なんと御同前の親友仲間

野助
息氣相投合セル
同柄

左皮氣
人ニ逆ラフ氣質

準
必ズ聞キ入レル

只可
只……ナルバカ

で、誰が汝方兄弟を離間するでせうか。御同前の親友仲間には無論誰も彼に分家せよと教唆は出来ませぬ、私は知つて居ます、彼は近頃新に數人の朋友が出来ましたが、皆餘り好ひ人ではありませぬ、多分屹度その人等が教唆したものです。さうして汝は私方へ御入來になつて、如何處置を着ける御心組なのですか。私の來ましたは、舍弟が平素汝と仲が好いのですから、汝は近日中に彼を御宅に呼んで、是非彼に分家をして、いやに御勤めを願ひたい積りです。私が御舍弟を宅に呼んで御異見申すとは何も差支はありませぬか、去りながら、私共二人は平生仲は好ふございますが、如何にせん令弟のあの捻けた氣質に至つては、私も彼れがきつと私の云ふことを聴くとは受合ひ兼ねます、若も令弟が忠告を聴なかつたらば、如何處置をしたものでせうか。彼れが若も眞に異見を聴入れなければ、致し方がありません、只彼の言ふ通り分家させるばかりです。若も彼が是非分家を望まれた時は、汝は如何いふ風に分配なさる御積りですか。私共の不動産は二

下
殘餘ノ分、餘リ
凡田舎ノ地ニ村
庄アリ鎮店アリ
商店軒チ列子駿
鎮店スル地之テ
鎮店トイヒ否ザ
ルチ今本村ニハ
仍テ今本村ニハ
鎮店チ今本村ニ
町ノ街合ニヨリ
各ノ街合ニヨリ
馬ノ家畜ニイ
客商人
放商人

經
仲
買
人
牙
帖
札
免
許
手
形
解
斗
ナ
リ
指
ナ
リ
因
二
百
凡
ソ
資
本
チ
得
ル
シ
ン
レ
ヨ
リ
得
ル
唯
指
斗
チ
得
ル
シ
ン
レ
ヨ
リ
得
ル
用
錢
チ
得
ル
シ
ン
レ
ヨ
リ
得
ル
往
下
口
往
上
口
往
下
口
往
上
口

まなか、そこで私は直にかの于の許に行つて、この事を談判した所が彼
は一向知らないと言ひました、私は直に役所に行つて彼を訴へました、
知縣が取調の末彼に私の持地を占領したるのを、悉く私に戻させまし
た、そこで私は直に悉くそれを賣拂ひました。左様でしたか、汝など
は毎年收穫せらるゝ所の穀物は皆貯へて自分に食へなさるのですか
又は買らるゝのですか。悉く貯へて自分で食へませぬ、家には僅か
三四十石残し、其餘の分は皆賣ります。汝の穀物は大抵何處へ販
賣なさいますか。私共の住うて居る所から數里距つた處に、大きな
町があつて、五日毎に市があります、私共は何時も穀物を馬に負はして
其の驛へ賣りに行きます。驛では穀物店に御拂になるのですか、又
は旅商人に賣らるゝのですか。大抵旅商人に賣る時の方が多う御
座ります。汝が直接に旅商人に賣らるゝのですか。否、皆な仲賣
が賣つてくれます。その仲買等は皆官許を受けて居るのですか。
はい、官の許を受けて居ります、彼等は都て官から鑑札を受けて始めて

仲買になるのです。穀物の賣買に用ゆる升も皆官制のものですか。
左様です皆官制のものです。それではその仲買人等の儲は何の金
ですか。その仲買人は口錢を獲るのです。その穀類の相場は仲
買人が定めるのですか。仲買人が定めるのではありません。誰
が定めるのですか。誰も定め人は無いのです、大抵は斯うです、若も
その日に穀物が多く集まると自然に相場は下落し、若もその日に穀類
の來方が少ければ自然に相場は騰貴するのです、これが一定の道理で
決して或人が先に相場を立てるものではありませぬ。左様ですか
御話を承つて了解しました。

第十三章

私は態々汝に御尋ね申したい事があつて來ました。何事の御尋ね
ですか。汝は西山に一個處の果物園を御持ちではありませんか。
いかにも、一個處の果物園を持つて居ます。幾畝の園ですか。五
十畝餘の園です。汝は毎年その果物園は自身で果物を收入れて御

把樹包給
樹ノマ、ニテ賣
取ルチイフ
海淀
相好的
親
拉道
即也拉ハヒク也
之也中ハ云紹介
拉也舟上ニテハ
アルヘシ
過年也
外行
意人、門外漢ノ

五十四

拂ひになりませうか、又は樹の儘人に受負はされますか。以前は皆自分分で果實を收つて賣りましたが、この數年間は樹の儘人に受負はして居ります。汝は何時も誰に受負はされますか。私は何時も海淀の順義雜貨店に受負はします。私が今日來ましたのは、私の或親友が今度西城で一軒の果物店を開きました。彼は再三來て私に果物の受負することを、周旋をして呉れと頼まれました。私は汝が果物園を持つて居られることを、知つて居るものですから、それ故來て御尋ねするのですが、若も汝が明年樹の儘に受負はしたいとならば、私は汝等を御引合はせを致しませう。その人が若も受負ひたいとならば、それは何も出來ないこととはありませぬ。彼は又私にこの果物を受負ふには大抵如何いふ條件が要るか聞いてくれと言つて居ました。それは汝のその御親友は素人ですか。左様です、彼は元來素人で今度初めて果物商賣をするのです。その果物を受負ふには餘計な條件はありませぬ、唯果實を結ぶ時節に、私はその人と園に行つて見た上で、

包價
受負代價
看果子的
果園ノ番人ニ讀
看字上平聲ニ讀
黒下白日
也使得
ソレニテモ宜シ
下保、引受

一面、一手ニ
承管
賣テ買フ、引受
搭高棚
番小屋ヲ建ツ

五十五

受負直段を何程と相談をするのです、相談が纏まつて、金を渡されたら、その年の果實は即ちその人のものになるのです。受負が纏つた上は是非一人園番が要りますのでせう。それは無論です、是非一人雇入れて、夜並共に園内に居て、看守させなければなりません。その園番は御同前が其の人の爲に雇うてやるのですか、又は彼自身に捜すのですか。それはその人の隨意です、若もその人が吾々に雇入方を託したならば、吾々は其の勞を執り、若も其の人自身に捜したければ、それでも宜いのです。その園番が果實を竊んで賣るといふとはないでせうか。それは斯うするのです、若も私とその人の爲に雇入れた人間であらば、それは無論私が保証し、若もその者が果實を竊んで賣るやうの事があらば、私が一切處分せねばなりません。その番人には毎月給料を與へて外には何も要りませぬか。左様、その者には給料さへやれば宜しい、唯他に番小屋用の筵と板と、繩と、丸太などを受負ふ人が買うて與へなければなりません、後日番小屋を取壊す時分には、や

杆子 包果子的 拆果物受買人 拉下也 網着 起其儘ニオク 起去イテ行キ 就去トイフニ同 ナ但好ノ字ハ機 ナ送セズトノ意

坐儘 同置時計 鐘表計 修理 時計店

り受負ふ人が、これ等の物を持歸つてしまふのです。それならば若も樹から落ちた果實は如何處置をするのです。若も平生落ちた果實が多くない時には、その儘に捨置いて、受負人の何時か來た時に告ぐればそれで宜いが、若も偶、大風に遇つたり、或は雹に遇つたりして、落ちた果實が餘り多い時には、その番人は無論急いで請負人に報知して、その落ちた果實を取入れさせなければならぬのです。左様ですか、私は歸つて御話の次第をかの親友に話しまして、何か申したならば、復た御目にかゝりに來ませう。それでは左様なさいませ。

第十四章

劉才。はい。書齋のあの置時計があるかなくなつた、おまへは後程祥盛時計店に行つて、許番頭を伴ひ來て、修理をさしてくれ。畏まりました。皆様御精が出ます。入らつしやい、御掛け下さい。私方の擅那が番頭の許様に宅へ來て一の置時計を直してもらひたいとて私を遣しました。汝は何の御邸ですか。私は富邸に居る者

那宅 何レノ御邸、宅 照應トハ大家ニ用フ 御點見ニ願ヒマ 還是 ストノ意

吃烟 阿片烟ヲ喫ム 忌烟 簡直的 勞病 幹 爲ス也 可没提 目出サレナ カツタガ

です。棉花胡同の富様ですか。左様、棉花胡同の富邸です。御姓は。私の姓は劉です、汝の御姓は。私の姓は許。あ、汝が即ち許様ですか、御心安く願ひます。御互様に。御邸には今も猶朱といふ方が執事ですか。否、人が換りました。何といふ人になりましたか。范といふ人に換りました。如何してあの朱様は暇を取られたのですか。如何にも左様、あの方は辭されました。何故に辭されたのです。病氣の爲に辭されたのです。何病に罹られたのです。彼人は元來虚弱な體格なのに、その上阿片烟を吸ひました、今年あの人は突然阿片を止めましたが、それも止めきれない内に病に罹りまして、一日一日に重くなり、後には全く肺病になつて、何事も爲ることが出来なくなり、そこであの人は辭職して家に養生をしに歸つたのです。左様ですか、……時に汝は大時計ばかり修理するのか、又懐中時計も修理するのか御存じですか。主人は大時計を修理さすとの話で、懐中時計のことは何も話はありませんでした、だが

職工、職人
按着、職工、職人
同様ニノ意

新近
近日、近頃

を書くのです。それではその者が習ひ了つた後は猶其店で職工をして居るのですか直に他の店へ職工として行くのですか。それは都て其者の勝手です、その者が若も猶其店で職工をして居たいと思つたならば、賃銀を與へて手代同様に召使ひ、若もその者がその店で職工をして居るのを望まず他の店員となるも宜いのです。左様ですか、そうして先達汝に一つ目醒し時計を買うて下さいと頼んで置いたが、御買ひ下さつたか。はい、私はこの城内の各店は皆な探がしました、が有りません。近日私と同職の者が天津へ貨物を仕入れに行きましたから、私はその者に西洋の商館で、汝の爲にさがして呉れと依頼しました、若も有れば、その者が歸りますときに即ち持參致します。それは眞に御面倒を掛けました。どう致しまして、私はもう御暇致します、何れ近日御目にかゝります。汝御歸りですか、御苦勞でした。どう致しまして。

第十五章

解由也、徒也
打由也、徒也

街坊、同宿者、同
町村ニ住居スル
人、何レニモ通
野野口
野野口
野野口

受累、難儀ヲナセリ、
住下ノ意
宿泊、泊リ込ム
預ケ置
前替槍
槍ハ銃ナリ、
ニシテハ銃ヲ用
前與扛同

汝は自宅から御入來でしたか。はい、自宅から來ました。なせ此頃は御見受しませなかつたか、何を爲て居たのです。私は地方へ獵に行きました。誰と御出でしたか。それは私共の或る近所の者と同行しました。何處へ獵に出掛ましたか。東山へ獵に行きました。何時御歸りでした。昨晚歸つたのです。何んな野獸がどれほどとれました。雉や兎など、又猪を一疋獲ました。それでは汝方の今度の獵は外れなかつたのですね。外づれないとは外れないのですが、結局難儀をしたのも、一通りでありませぬでした。如何いふ困難をなさいました。私共兩人各自馬に騎つて行き、東山へは尙敷里離れて居る或る町に來てから、私共はそこでその驛で或る旅館を搜して宿泊しました、翌日になつて私共は旅館で飯を食べてしまつて、その二頭の馬は旅館に預け置き、私共兩人は直に銃を肩にして、ぶら／＼山に登りました、山上に着いて、私等は初めには唯少しの雉や兎を獲たばかりでしたが、日が西に傾いた時分に、突然一疋の野猪が驅

天有不平四的時候
日ノ傾イタ時分
跑來了
累的
疲勞シテ
換替着
交ル々々、交代
ニ

途在
繋ヤ置ッ

山底下
山麓

没找着
見出シ得ナイ
下起來
降リ來ル
頂着雪
雪チ付シテ

けて來ましたから、私等兩人は直に銃を放つと、忽ち打止ました、其地ではその野猪をかつぐ人夫を雇ふことが出来なかつたので、私等兩人はその野猪を曳きすつて、旅館に歸つて來ました、家に歸る時には、私等は一頭の馬に猪を負はせ、兩人交代に他の一頭の馬に乗つて、歸つて來ましたが、家に着いた時には、疲勞して動き得ない程でした、なんとこの難儀はたいしたものでせう。汝方は少なからぬ困難を受けられたが、結局尙野獸を仕止められた、私共の或親戚は數日前獵に行つたが、何も獲物が無つたのみでなく、却て彼の一頭の馬を失なひました。何うして獵に行つて馬を失ふことになつたのです。その者が私に話しましたに、彼は馬に乗つて北山へ獵に行つて、その馬を、山麓なる一本の樹に繋いで置き、彼れは直に銃を肩にして山の上へ野獸を搜索に出掛た、彼は長い間探したが、一頭の野獸をも見着け得なかつた、そこで彼は山を下り、麓に來て見た所が、彼のその馬がなくなつた、兎角する内に空は忽ち雪が降つて來た、彼は雪を冒して此處彼處と暫らく搜したが

黒上來
暮レカカツテ來
將就着
我慢シテノ意
札指
ツトメテ、病チ
直ニ也
終久
早晩ト譯ス
過路的人
通りがかりノ
名
ナント、如此也

背
ウラムキ也、コ
コニテハ不運ノ
意

矢張ない、その間に空も暗くなつて來たので、彼は一つの破れ寺を搜し出し、我慢して一夜を明した、翌朝になつて、體の具合が悪く感じて、己むを得ずそれから力めて役所に行つて届け出した、役人が馬を失した所を以て取糺して而して彼に言つたには、自分は直に役人を出し諸方へやつて、おまへの馬を搜してやる、若もこの土地の者が汝の馬を偷んだのならば、早晚搜し出すとが出来、若も通り掛つた者が、汝の馬を偷み去つたのであつたならば、それは搜し難い、おまへは先づ家に歸つて居るがよい、そこで彼は、一頭の驢馬を雇うて歸つて來た、家に着くと病氣は一層ひどくなつて、今に至るも尙全快しない、なんと此の人の彼れが此の運氣は大變悪いではありませんか

第十六章

足下、汝は未御互のあの朋友なる馮子園が死んだことを御聞込になりませんか。私は未聞きませぬ、彼は何時死んだのです。今朝或人が言つて居ましたが、彼は昨晚死んだのです。彼は何病で死んだの

留下
得了一出病
不圖病氣ニ罹ッ

收丁
片付ク閉ツル意

機是的
然ルベキニノ意

餘の金が有る、我々兩人は悪意な間柄であるから、私が死んだ後で、總ての私のあの金と道具とを皆汝に頼むから、どおか私の宅に送り回して下さいと、彼はその時に直に皆承諾した、其人が死んだ後になると彼は忽ち變心して、只道具のみをその人の家に送り返し、それからかの一千餘兩の金は瞬時に附してしまつた、其後その家族は手紙で、死人が金子を残して居なかつたかと尋ね越した、彼は直に一封の返信を認めて、金子は残つて居ないと言ふてやつた、その後彼は突然病に罹り、住宅で養生をして居る中に、彼の店に居た一人の手代が、彼れの數百兩の金を竊んで逃走して、彼は病氣が癒ゆるや否や直ちに商賣も止てしまつた。汝この都ては誰に御聴きでした。私はこの都てを彼の店で商法見習をして居た、一人の弟子の話しを聞きました。彼の如きは従前に既に一の悪事を働いたらば、當然前非を悔い改心すべき筈なのに如何してその後復今度のやうな悪事を働いたのでせう、今となつては、やはり自分で自分の命を取つたのです。汝は分りませぬか、凡そこの様

道宗
道徳又ハ道徳様
ニ同シ
九齊徳外
徳外トイフニ同

要領當
目下質受ガシタシノ
意ハ欲ノ意
ナリ
另外
ソノ外ニ、別ニ
官人ノ從者

使喚
打主意也
考チ速ワス、手
段ヲ講ス
教道層
勤メ口ヲ探スソ
ノ事ハ
別給他管
ルニ攝テヤラ

な良心の無い人間は大概皆こんなものです、若も一度金を見たならば、忽ち因果應報の道理は何處に行つたか全く忘れてしまひます、彼が今度阿片を喫んで死んだのは、全く報に遇つたのです

第十七章

汝、今し方あの馬君が来て汝を訪ねたのは、何を話したのですか。彼は目下質受がしたいからとて、錢數十吊を借りたく、外に又官吏の從僕となる口の周旋を頼んだのです。彼の頼んだこの兩件を汝は都て承諾なさいましたか。左様、私は皆承諾して、私は斯様に話しました、目下自分の手には金が無いから、何處へか行つて借つて来て進せやう、若も借ることが出来たらば、御使ひなさつてよいか、若も借ることが出来なければ、汝は他に方法を考へるが宜い、口をさがすことは今後從僕を求むる官人があつたならば、私は屹度推舉してやると言ひました。私に言はずれば、彼の頼んだ、この二件は汝一切構ふて御遣りなさいますな。何故です。汝が若も彼に金を借りてやられたならば彼は

返還過
返シタコトガナ

娶去
賭博チンニ行ク
賭博場
我の上

早就
決ニ也
出丁門子丁
他家ニ嫁ス、子
歸也
成家
娶婦チイフ

多大年紀
幾錢

仕替
過日子
口ナ過ス、度日
任其
何事ナモ、不
何也
花
金錢ヲ費フ、花
ハ消費ノ意
般
口イヤ、食嗜
飲食也

迷京
引見
朝見也道台以上
朝見トイヒ朝見ナ
以下ノ官人ノ朝
見ヲ引見トイフ
會館
俱樂部也、元來
ハ

吃度返金しませぬ。汝如何して彼がきつと私に返さぬといふことを御承知ですか。彼は從來他人から借りた金は都て返したことはありませぬ、それ故私は今度汝の金を借りても、後來やはり必定汝に返さぬと存じます。私はこの數十吊錢、彼が私に返さぬといふことはあるまいと思ひます。數十吊錢は言ふまでもなく、縦合數吊の錢でも彼は猶返さないのです、その上彼はこの金を借りても、真に典物を受戻しに行くのではありますまい。彼は質受に行くのでなくて、何に消費するのでせう。彼は賭博をしに行くので。何と彼は又賭博も爲ますか。彼は最賭博が好きで、終日賭博場にばかり居ます。彼の家には全體如何いふ人が居るのです。彼の母親は疾く失くなつて、今では父親ばかり生きて居ます。彼には兄弟姉妹はないのですか。彼は兄もなく弟もなく、唯一人の姉がおりますが、疾に片付いて居ります。彼は尙嫁を持つて居ないのでですか。まだ彼れは無妻です。彼の父親は何歳ですか。彼の父親はもう何うしても當年

七十餘です。何をして居るのです。大工職をして居るのです、以前小さな材木店を開いて居たことがありましたが、其後閉店してしまつて、今では只他人の仕事をしてそれで金を儲けて日を送つて居ります。あの男は何が出来るのです。彼は何にも出来ず、只金を浪費するばかりです。彼は商法見習をしたことはありませぬか。彼は一度商法見習をしたことがあります。彼は何の商法を見習ひましたか。彼は或藥舗で商法見習しましたが、行つてから一ヶ月計りで番頭が彼をやめました。何故彼をやめましたか。それは彼が口いやしく又懶惰で、店の規則を守らなかつたから、それ故直によされたのです。それでは彼れは其後他の事はしませんでしたか。彼は其後又一度官吏の従僕になりました。何官の従僕にですか。或年一人の地方官が朝見の爲めに上京して、城外の會館に逗留された、或人が彼をその官吏の従僕に推舉した、その官人は毎日彼を外に行つて、骨董や玉器など種々の物を買はせた、所が彼は任意に儲けて、三個月

官初同郷出身ノ
 官途が相五ニ保
 建的ニテ北京ニ
 建シテ時ハ官更
 ノ外買チハ加
 ノ各同方面ニ於
 ケル温メ相ノ交
 俱ニシテ相ノ交
 ノ保ニハ相ノ交
 ノ中ニハ相ノ交
 ノ安ニハ相ノ交
 ノアルナリ
 古玩
 毛茸品
 花好カラメ手癖
 宋使ヒ果シ
 要道了ノ時
 断就
 判新チツケテ居
 ル、陳測シテ居
 抱沙鍋
 沙ノ鍋ヲ抱シ、
 乞食ニナル謂
 就了喝
 アソレテ宜イデハ
 アソレセシカハ

七十一
 ばかりの間に、彼は數百兩の金を儲けた後、かの官人は彼の悪い手癖を
 知つて、直様彼を断つた。目下かの數百兩の金も、大方丁度費ひ果して仕
 舞ふたので、それ故汝の處に借金に來たのでせう、それから私は汝に勸
 告するが、彼には金も借りてやらす、奉公口もさがして御遣りなさいま
 すな、汝が若も金を借つてやられたならば、彼は屹度汝の顔を汚すやうなことを
 奉公口を搜してやられたならば、彼は屹度汝の顔を汚すやうなことを
 しませう、寧彼の事には御構ひなさらぬ方が却て宜いでせう。それ
 では汝の御話に據ると、今後彼の父親が死んだならば、彼は難儀をする
 でせう。私は疾より彼の父親が死んだ後では、彼は屹度乞丐になる
 と判断をして居ります。それで彼は彼が依頼せしかの二件は私は何
 と返事しませうか。汝は彼に金は借ることが出來ず、奉公口は無い
 と御話にならば、宜いではありませんか。然らば、私は御忠告通り彼
 に告げて彼の望を絶たせませう

第十八章

琉璃廠
 北京ニ於ケル
 書店、文具店、骨
 董店ナドノ多ク
 アル市街
 配袋
 帙ヲ付ケル
 單子
 一袋
 一帙

李起。 はい。 おまへは此本を、琉璃廠の寶文堂書店に持つて行つ
 て、兪番頭に言ふて帙を着けさせてくれ、而して又この書付も彼に渡し、
 あの人の書付面に書いてある通りの本を、一部毎に先づ一帙づゝ、汝に
 渡し持歸つて私にみせる。 はい、檀那若も他に御用がなければ、私は
 今から直に参りませう。 他に用はない、おまへはこれから直に行つ
 て來い。 皆様御免下さい、番頭の兪様は御在店ですか。 はい、内に
 居ります、汝這入つて御掛け下さい。 兪様御精が出ます。 李様、汝
 は御邸から御入來でしたか。 はい、邸から來ました。 汝御入來下
 したは何か御用ですか。 如何にも左様、私共の檀那が私を遣はされ
 この本を持つて参り、汝に帙を付けてもらい、而して又此處に書付があ
 る、汝見て下さい、主人が申されますには、汝にこの書付に書いてある通
 りの本を一部毎に一帙づゝ、私に渡して持歸つて、一先見せよとのとで
 す。 この帙は私共直に付けてあげませう、御書付本は、私共の店に現
 在、二部だけは有りますが、残りの數部は私が更に何處かへ捜しに行か

打發
道ハス

なくてはなりません。 それでは、先づ御店に有るその二部だけ渡して下さい。持ち回ります、残餘のその數部は何處かで捜して下さい。數日後に私が復汝の處に取りに参ります。 私の考では、汝此處へ取りに御出には及びませぬ。其内若も私が捜し出しましたならば、私は直ぐと自身に御邸へ持參致します。 それは一入結構です。 この二帙の本は包んで置きました。 それでは拙者は御暇します。 汝御歸りですか。 檀那に申上げます、あの本は兪番頭に渡して装帙して呉るやうに申して置きました。汝が御入用のあの數部の本は、あちらの店に二部だけは有りましたから、その二部だけを持ち、歸りました。汝に御覽に入れます、外の分は兪番頭が他處で捜出さなければなりません。其内に彼が若も捜し出したならば、彼れ自身に持參致します。 左様であつたか、汝は先づこの二部の本を、書棚の上に載せて置いてくれ。 李様御精が出ます。 兪の番頭さん、汝は今入城でしたか。 左様です。今し方入城しました。 汝の持たれたのは、それは何の本ですか。

親身
書架子

宜去
公用ニテ行ク、
往來御去
テ、往復共

これが此間御主人が捜せと仰せられた、あの數部の本です、私は皆捜し出して持參しました。 私共の檀那は天津へ行かれました。 何時御出になりました。 昨朝出立せられました。 公用で御出張になつたのですか。 公用で出張せられたのではありませぬ、私用の爲にです。 幾日程御出になりますか。 往復とも總て十日はかゝりませう。 それでは私の持參したこの本は如何しませうか。 檀那が申し置かれました、もし汝が本を持つて來たら、受取つて置けと。 それでは汝見て下さい、ここに六帙あります、あの初めの御書付に載つて居ましたのは八部ですが、先達汝が二帙御持歸りになり、私が今日一部毎に又一帙づつ持參しまして、前後合して八帙になります、尙この書付も汝から御主人に御渡しを願ひます、あらゆるこの書籍の代價は總てこの書付に認めてあります。 左様ですか、では帙を付けるあの本は、汝は付けて下さつたか。 付けましたが、私は今日持參することを忘れました、何れ再参ります時に持參致します。 それで宜しい。

算計者
推察スルニ
月底
月末

那倒不用
其却不交也
順序、申領

説合
仲裁於談

汝の御考で私は何日伺へば宜いでせうか。 私が勘定しますには、檀
那は月末でなければ歸りになりませう、こうしませう、主人が歸りに
なりましたならば、私は城を出て汝を呼びに行きませう。 なに御足
勞を掛けるには及びませぬ、私は月末、月初にはまだ別に用事があるの
で、城内に來ますから、序でに立寄り、御尋ねすればそれで宜しい。 そ
れでもよろしい。 それでは私は御暇致します。 汝御歸りですか、
御同前は近日御目にかかりませう

第十九章

貴兄、何故私が毎度御訪申しても、汝は何時も御留守ですか、汝は何で御
忙がしいのです。 私は他人の爲に仲裁事件にかかつたのです。
汝は人の爲に何事を仲裁なさつて居られるのですか、御聞かせ下さる
ことは出來ませぬか。 何も御聞かせ申されないといふことでもあ
りませぬ、それは私共の親戚の知つて居ます、或友人が、他人と訴訟を起
したので、私共の親戚の者が私に出てその人等の爲に仲裁をしてくれ

銀錢
目録
帳簿

東關外頭
東門外頭也

洋布
金巾
批單
買賣契約書、注
交貨
文書
貨物ヲ引渡ス

と頼みましたからです。 それは金錢の計算上からの事ですか。
金錢の計算上からではありませぬ、貨物を買ふた事からです。 貨物
を買ふて何うして訴訟を起すことになつたのですか。 それは斯う
いふ事です、私共の親戚の知合ひのこの友人は沈といふ姓で、彼れは保
定府で大きな西洋雜貨店を開いて居て、屋號は信義と申しますが、彼は今
年の夏當地に來て、東關外の福盛店に逗留して居ました、御同前のこの
大東街の泰和西洋雜貨店へ、六十包の金巾を注文し、注文書の上には明
らかに二ヶ月の荷渡しと認めてあります、先月になつて日限に達した
ので、沈番頭は泰和店に行つて、貨物は到着したか何かと問ふた所が、彼
等が云ふには未到着しないと、そこで沈番頭は又數日待つて再び行つ
て尋ねた所が、貨物は尙來ない、數日前沈番頭は西街の間屋へ他の用が
あつて行かれた、聞込んだには近頃或旅商人が泰和店から六十包の金
巾を買ふ約定が調ふた、それは王といふ仲買人の手から買ふたのであ
る、その旅商人の買ふた直段を聞くと、沈番頭が疊に取極めた直段より

見
金ヲ仕拂フコト
起
荷渡シ

指出来
名指シ言ヒ出ス
下月
來月

定銀
手付金

呈詞
粘貼状
粘貼付、添付
前見
過一昨日
訊問所ニ出ツル
コト即チ訊問ヲ
開クナイフ

和息呈詞
願下届、和解セ
シ旨ノ届書

當
質店、注意當字
去聲ニ讀ム

も高價であつたが、代金は尙渡さず、貨物もまだ引取らないとのことであつた。沈番頭が思ふには、これは必定自分が注文をしたあの六十包の金巾で、泰和店が目先多額の利益を貪つて、他人に轉賣したのだ。腹が立ち不平でたまらず、そこで沈番頭はその夜泰和店にこの事を尋ねに行つた。泰和店では取合はず、その様などはないと言ふた。其後沈番頭はかの王といふ仲買人のとを言ひ出したので、泰和店では仕方がなく忽ち閉口した。而して言ふには、來月復六十包の金巾が來るから、沈番頭にその六十包の金巾の來るのを待てと、沈番頭は待たれぬ、現在茲に在る、かの六十包の金巾を渡せと申出た。泰和店は渡すことを承知せず、言ふには若も眞にその六十包の金巾を俟たるゝことが出來なければ、只當初御渡になつた手付金を御返し申して注文書を焼けばそれで個様なことは消滅するのだ。沈番頭は承知せずと言ふには、只手付金を戻してもらふのみでは宜げない、尙ほ利益の損害を賠償してもらへば宜しい、泰和店は堅く利益の賠償を拒んだ。そこで沈番頭は直に一枚の訴狀を認

め、かの注文書を貼用して縣衙門へ泰和店を告訴した。一昨日知縣は裁判を開いて、彼等原被告を概略審問し、彼等に一時引取人を頼んで仲裁をさせよ、若も仲裁が行はれねば、更に一枚の訴狀を差出せ、更に審問を遂ぐるであらうと命じた。そこで私の親戚の者は私を搜して、助けて彼等の仲裁をせよとて、昨晚になつて漸く雙方に示談を遂げさせました。汝は何うしてその人等に示談を遂げさせなさいましたか。私共は其人等に斯う仲裁しました、やはり泰和店に先づ現在有るかの六十俵の金巾を沈番頭に渡し、泰和店から彼旅商人には來月になつてかの六十包の金巾が到着したらばそれで渡しますといふやうにといひました。そこで一同承知をして、昨晚貨物も引取り金も渡しました。それで明日沈番頭は縣衙門に一枚の願下届を差出せば、それで落着です。

第二十章

汝、此處へは店から御入來でしたか。否、私は天盛質店へ質の流れ品の入札に行つて、今歸つて來たのです。汝御飯は濟みましたか。

封貨 賈ノ流レ品ヲ入
札シテ買フヲイ
厨子 料理人、賄人
預備 用意、支度
得價宜 利益ヲ得ルヲイ
上宿 他人ノ味職ニ係
走 紅運ハ當ルノ意
運チナリ走紅運
ハ吉事ニハ捷テ
紅ヲ用フ故ニ吉
就許 就許者之意
打眼 看錯也

私は済ましました。 汝若も御飯前ならば、私が料理人へ急いで仕度をさせませう。 私は真に済ましたのです、私は或悪意な人と一齊に外で食べました。 それならば宜しい、今日天盛質店は品物が多う御座いましたか。 骨董や玉器は少なく、衣服や銅錫の器物は多かつです。 汝は皆何んな品を御入札でしたか。 私は二個の懐中時計を入札したばかりで、他に入札しませんでした。 なんと入札は甘ひ事が少く、太抵騙されるものが多いと思ひます。 それも運に因ります、若も好運の人が入札に行くと、随分恰好品を見付けて、入札をする、質屋は知らずに直にその人に賣渡してやるので、その人は大變に御金を儲けます、若も不運の人が行くならば、その人が入札さへすれば直に見損ひ質店が元來質受の見損なひで、その人が更に入札に見損ねる、利益を得ぬのみか、却て尙幾何程かを持出さねばならぬとになります。 汝の御話は真に遠ひがありませぬ、私共の店でも、數年前から幾度も入札致しましたが、一回も損をしなひとはありませんでした、それ故此節

遠親 縁ノ遠キ親戚、
薄縁 縁ノ薄キ親戚、
細細 仔細ニ見ル

近者頭 近クコト出遇フ
ナウニ

小車子 小車子
推車的一輪車
車夫的一輪車

は何處の質店から案内があつても、私共は決して入札に参りませぬ。 私は汝に御話しますが、昨年或一點の入札で利益を得た人があります、この人は私共の遠い親類の者ですが、昨年十月西城の恒順質店から彼に入札の案内が参り、彼は一個の銅の懐中時計を四兩に入札して、質屋では直に彼に賣渡しました、彼は家に持ち歸つて、細に見れば、思掛けないそれは金時計であつた、その後彼は手入をして、四十兩餘に賣て十倍の利を得ました、これこそ本當に掘出し物をして仕合せを得たのです

第二十一章

汝、今し方私は御店へ汝を訪に行きました、手代等の言ふには、汝は西街に行かれた、それ故私は行合ふやうに汝を尋ねて來た所で、いゝ具合に御出遇申しました、汝は何故斯んなに早く西街へ行かれたのですか。今朝汽船が着きまして、私共の店では一人の客人の爲に小車を雇ふて手荷物を運ばしてありました、車夫が客人へ二個の箱を運び損じたので、客人は承知しない、手代等は困り果て、人を遣はして宅に私を呼び

漢字
手段盡キ

に参りました、私は起きたばかりに、この事を聞き私は直ぐと急いで顔を洗らひ店に行つて客人に遇ふて尋ねますと、その客人の言ふ所では、彼は姓を陳といひ福建人で、江蘇で役人をして居り、今度上京するのである、今朝汽船が此處に着いたので、彼は船から下りて、私共の店に泊り、彼は直ぐと私共の店の者に二臺の小車を雇はせ、彼の一人の従僕を付けて船に行り手荷物を卸し、手荷物が店に運び来てからその客人が見ると、彼は二個の紅い靴が足らずに、その中にその客人のでない二個の白靴が有つて、その白靴には徐子芹の三字が記しておつたので、その客人は自分のあの二人の従僕に如何して二個の靴を運び誤るとになつたのかと尋ねた、その二人の従僕の言ふ所では、彼等の失策ではなく、彼等二人は船中でこま／＼した荷物を片付けて居る間に、あの二人の車夫が自分で船に乗込来て靴を卸して来たので、それが爲に運び違へたのですと言つた、そこでその客人は私共の店員に向つて、かの二人の車夫に疾く行つて、自分の二個の紅靴を捜し呉る様にと申された、かの二

錯
失策、錯誤
片付、取揃

要了
是非ニト要求ス
急イテ

人の車夫は行つて暫く搜索したなれども、見付得なかつた、客人は如何しても承知せず、是非に自分の靴をと求めた、店の者共も皆周章て、直ぐと急いで使を走せて私を呼びに参りました。汝は其客人にその二個の靴を捜し出しておやりなさいましたか。はい、私はその徐といふ客人を捜し出し、陳氏のあの二個の紅靴が彼の方に有つたので、私は今し方店に歸つて、先づ一臺の車を雇ふて、徐氏のかの二個の白靴を送届け、かの二個の紅靴と引換へて来ました。汝は如何してその徐といふ人を捜し出されましたか。私は先づ私共のあの町の各旅館を尋ねたが、一向徐といふ客人がない、そこで私は西街に行つて、旅館を一軒毎に尋ねて、永利旅館に尋ねて行つた所が、その店の者の言ふには一人徐といふ姓の客人がおりますが、今到着せられたばかりですと、そこで私はその客人の座敷に行つて號を問ふと、彼は子芹と呼ぶと申された、私は直に運び違へた靴の事を話しました、その人が言ふには、自分の荷物は今来たばかりで未だ點檢しない、私が今見れば直に知れるか

各各
各旅館ニ就イテ
屋敷、部屋

盤査

現納

イフ或因ニ
テハ或地方ニ
納付スル所アル

流川、私事ニ消

抄、決意、抄

ハカキリツス也

家産ヲ書立テ

官ニ没收スルナ

イフ

寸歸れないのです。如何して歸れないのです、それは旅費が無いのですか。旅費が無いのではありません、それは彼が免職になつた後で、巡撫が委員を派してかの役所へ倉庫を検査にやりました、彼が遣ひ込んだる四千兩餘の租税を發見された、委員は彼に如何して斯く多額の租税を缺損せしめたるかと尋ねた、彼は彼が融通せりと白状した、そこで其委員は直に巡撫に上申しました、巡撫は直に役人を派して彼の住宅内の家具を悉く封じて、王子泉を撫署に拘引し、彼に二ヶ月の猶豫を與へて、彼に使ひ込んだる國庫のこの租税を悉く返納するにさせ、若も期限が過ぐるも返納しなければ、直ちに勅裁を仰いで、彼が北京の家を沒收するとなつた、そこで彼は周章て、直ぐと一封の手紙を書いて、彼が一人の家來を遣り北京に至り、彼の兄に面會し、彼の兄に如何なる方法を盡してでも至急に五千兩の金を集めて、この家來に渡して、彼に送届け呉と頼んだ、彼の兄はこの手紙を見て、非常にせき込み、私を尋ねて来て、私に彼が城外のあの店表家を賣つてくれと頼みました、そこで

交還上

啓封
ナ開ク

止高候
其ヲ取ルコトヲ
止メ受出テ待ツ
只也

私は急いで賣つてやりましたか、まだ仕合に五千兩に賣れました、一昨日彼の兄が、參つたあの家來に渡して、彼れに持たしてやりました。それでは彼は若も消費した租税を殘らず返納したならば、彼れが寓居内に封じられたるあの品物は、何うなるのでせう。彼がこの金さへ返納すれば、上官は無論、役人を派して、彼が住居内に行き、封を切つて、直ちに物品を元通り彼れに戻されます、さすれば、彼も直ぐと歸ることが出来るのです。

第二十三章

あなた私は、汝に御尋ね申す事があります、御友人の錢輔臣のあの質店は、現今質入を止め、受出しを待つて居ります、これは何ういふ理由ですか。彼處の商賣は、駄目になりました、殆ど閉店をしそつて、何か。故に、聞けば、彼處の商賣は、至極好いといふとでは、ありませんでしたか、それが何うして行けなくなつたのでせう。汝は、其の外見ばかりを、知つて、其内情を御存じないから、當初、彼があの質店を開いたのは、

東家主人 納福樂居
 大眼 收支決算、大勘
 一概 定
 毛屑 一切
 算帳 帳簿検査
 盤算 商品検査
 虧空 損
 起那度一口氣
 アノ一腹立カラ
 本家的人
 親族本家人

金を儲けました、邸内に建た家屋も少なからず、上下百餘人の多人數で、驛馬は群をなして居た、この様な財産家も去年になつて、偶一失敗で頭が擧らなくなつた、私は初は何うして斯く急に失敗したか知らなかつたが、後になつて私は細に聞いて、漸く分つたのは、成程それは近年商賣が儲かつたので主人は全く店に出て來ず、家にばかり居て樂をし、また久しく大決算をしなかつた、店に居るあれ丈の手代等は毎日日が暮れると阿片を外へ偷み出したが、主人は全く知らなかつた、昨年になつて矢張鄰に二人の友人があり、彼の店に弊害の有ることを知つて直ぐと彼の店に行つて決算と店卸しをさせた、そこで彼は漸のことで店に行き決算すると喰込が數萬兩となり、又品物を調査すると、僅に數箱の阿片が残つて居計りだ、彼は直に手代等に勘定が何うして喰込み代物が何うして不足せしかを詰問した、あれ丈の手代共は皆知りませぬと申した、そこで彼は詮方なく、家屋や家畜を悉く賣つて、漸く彼の外國商館の金を悉く片付け、その後店をも閉ぢてしまつた、彼はこの心勞から病

苦境 苦境
 收場 末路

と成り程なく死去した、家の召使共も皆散つてしまつて、即ち彼等の本家の者のみ残つた、此節は全く食ふや食はずです、斯る苦境こそ、なんとこれが皆な阿片賣りの末路ではありませぬか。

第二十四章

原本 元、初

居停 居停
 主人 主人
 用主 用主
 調任 調任
 迎也 迎也

老弟、汝は何時歸られたか。 私は近頃歸つて來ました。 汝は今度江西から御歸りでしたか。 否、私は江蘇から歸つて來たのです。 汝は最初江西に行かれたのではないか、何うして今度江蘇から御歸りでした。 私は元來江西に行つたのですが、其後更に蘇州に行きました。 汝は近年他處に居られて、御都合は何うでしたか。 江西に居た數年間は、大層都合が好しかつたが、蘇州に行つてから後は全く都合が悪うございました。 汝は江西で好都合で居られたのに、何故又蘇州に行かれたのですか。 それは私共のあの舊主人が昨年雲南へ轉任され、私を御連れになる積りでした、私は道程が餘りに遠いのを嫌ふて、行くことを望まず、北京に歸る積りでしたが、彼は私に勸めて歸らし

同年的

己ト同年ニ進士
若クハ舉人トナ
リシ人ナリフ
考次ノ内文書ナ
キルモノナリフ
師範ハ豫稱ナリ
欺生
新參者ト僥成ス

辨我
自分ヲケモノ
ニスル、辨ハ分
明也

不和ノ意
再往下
混
コノ上引換キ
一ツ處ニ居ル
生分
不和ヲ生ス

還歸的
ア宜シキ方、
罷了ハ可以ニ同
不便提
目出シ兼子テ
同人
同僚、同勤者

めないで申さるゝに、彼と同年のものが蘇州に居り、和と云ふ候補道である、彼は私を推舉して彼方に行つて祕書役にしたいのです、私も行くことを望んだので、そこで、彼は一封の推舉状を認めて、私を蘇州に送り遣られた、私が蘇州に到着して、初めて和氏の處には外に二人の祕書役があることを知りました、その二人は皆浙江人で、私の行つたのを見て皆新參者と侮り、私は萬事邪魔をされました、彼等が若も土語で談話を仕掛けられても、私には一句も判らず、若も偶、私が彼等に物事を尋ねると、彼等は皆知らぬ素振をして私に話して呉ない、即ち出掛けて遊歩するにも、彼等二人は何時も私をのけものにする、私は彼等の其様子が如何にもいじめすぎると見へた、自分が考へたのに、互ひに若も今後猶一處に居たならば、でもなく不和を生するだらう、そこで私は直くと其處を辭して歸つて來ました。その和氏が汝を待遇するのは何うでした。かの和氏が私を待遇されるのは、まあ可い方でした、即ち今度私が辭して歸る時分にも、彼は私に、何故辭するかと問はれました、私も同

要考供事
書記ノ登用試験
ニ應セントシ
着比
譬如也、例ヘバ
考上
登第

合宜的事
適當ナル事、相
應ナル事

僚と氣が合はぬからですとは言ひ出し兼ね、私が申すには、私は京に緊要な用向がありません、是非一度歸らなければなりませんと答へました、彼は又申さるるには、若も私が京に行き用事を處理してしもふたらば、再び歸つて來てくれとの事でした。それでは汝今度歸られたのは、又地方へ行く御積りですか何うです。私が今度歸つて來たのは元は書記の登用試験に應じたい積りでしたのです、假に若も及第したならば北京で職に就き、地方へは行かない積りでした、歸京して聞けば試験は既に済んだ後でした、唯今私の考へは斯うです、若も相應な事があれば私は地方へ行つてもよし、若も相應な事がなければ私は先づ北京に居てよいのです。目下或る地方出口の口があるが、汝は行く氣があるかどうか。それは何ういふ事柄です。私の或る親友で、彼は近頃山西省の太原府の遺缺知府に任命せられた、先日彼れは私に一人の幕友を招聘してくれとの頼みでしたが、私は今差當り推薦すべき人が思ひ出されないのです、今汝が歸つて來られたので、若も汝行る氣

東條 報酬、手當、給料
好 禮物ノ意ナリ
話シ易シトノ意

時常的
始終的

九十二

ならば、私は汝を推舉しませう。此方は何といふ姓名です。彼は姓を常、號を春圃と申します。旗人ですか。左様、旗人です。彼の人物は何んなのです。それは心切で温和な人です。左様いふことでしたらば、汝私を御周旋下さいませ。報酬の事は何んな御望みですか。その事は然るべく貴方が御取極め下さつて宜しい、只その人と氣さへ合へば報酬の多い少ないは構ひませぬ。彼の人物は私が保證する、汝方二人は屹度意氣相投するでありませう、それでは明日私は遇ふて汝の話をしませう。御親切難有存じます。かう致しまして。それはそおと、汝は現今何も公職に就いて居られないのですか。居りませぬ、私はあの年病氣で歸つてから、今に至るまで、舊病が猶時々發るので、逆も公務に就けませぬ。それでは貴方は毎日御宅で何を爲て居られますか。天氣の好い日には友人を往訪して談じ、風の吹く日や雨の降る日には、即ち宅で書見をして居ります。それでは貴方はまゝ眞に清閑の御身分ですか。何が清閑です、唯空し

く歳月を送つて居るに過ぎないので

第二十五章

老弟、汝に或る可笑しなことを話します。何のやうな可笑しい事ですか。此の月の或日の夜、子の刻過であつたが、私が眠着いたばかりに、私共の宅の後の庭内で、ことんと音がして一人の人が跳込んで來たので、私は驚いて目が醒ました、私は必定賊が這入つたと合點し、急に召使等と呼起し提灯に火を點けて見にやつた、そこであの數人の召使等は人が居ると聞いて、皆急いで起出で、提灯に火を點け、棍棒を持つて後の庭園に行つた、この間に私も起出で、雨戸を開けて後園に見に行つた、私が園庭に行くや、召使等が申すのを聞くに一人の人間を捕へた、身の服装は大層立派で、その上賊を働くやうな人柄でないと、又その人が申すのを聞くに、汝等私を引張るな、私は足を挫いて非常に痛む、私は賊を働くものではない、私は避難者だと、私は彼が避難者であるといふのを聞いて、私は取敢へず進んで見た所が人と爲りが頗る立派な青年であ

月裏頭
有三月内
三更過ケル刻限
咕吟的
物音ノ形容
睡醒丁
驚キ日ヲ醒マシ
燈籠
提灯
棍棒
棍子
體面
立派、上品
別立
提ヘナスナ
推シテ
年輕的人
青年、年若ナル
念書的人
讀書的人

相得

探竹
手ヲ執リ扶ケ起
不得助
西日ナシ、愧ヤ
フヒ

捕房
没地方
爬到去
瓜ニテ掻キ上ル
天交
起下野
能野ヲ起テ
能ク也

怨
別致也
趣テ異ニス

挨着
近付、親ミ
慢々兒的
吃上癮了
片ノ中癮ニテ病
ヲ得ルヲ癮トイ

方子
藥方書

跟人
從僕、召使

つた、私は更に懇ろに見ると彼を知つて居る、それは讀書人で、而して彼の姓は蔣といひ、城外に住して居る自分等は曾て城外の或骨董店で二回ほど遇つて、相互に面白かつたのです、そこで私は直に二人の召使に彼れを扶けて暫く運動させた、漸く直つた夫れから私は彼を書齋に導いた、書房に行つてから彼は一目見ると私であつたものだから、非常に面目なさそうな様子に見えた、私はやがて彼に如何いふ事に遇はれたのかと尋ねたら、彼が言ふ所では、彼は私共の宅の後方なる賭博場で賭博をして居つた所へ、突然一人の役人が兵卒を連れて召捕に來た、彼は逸早く逃げ出したが、隠れ場所がないものだから、それ故に土堀に搔上り、この庭内に飛込んだのです、そこで私は暫らく彼に忠告して將來を戒め賭博を禁じた、彼れを一泊せしめ、夜が明けてから歸つて行つた、昨日彼れは禮を述べに來て、彼が私に申さるゝには、彼は此度已に誓を立てたから將來は決して賭博をせぬと。此人などは、能く汝が一度勸告せられたのを聽分け、忽ち過を改めたのは、それは真に氣慨のある人

です、私が以前或る懇意な人があり、彼れは非常に阿片煙を喫むので、私は彼に禁煙を勧めたらば、彼は却て私を怒つて私と往來をしなくなりました。汝方のこの親友も亦真に變物ですな、何故汝が禁煙を勧められたのを、彼は却て汝を怒るとは。彼の人は真に理非の分らぬ人間です、彼は以前は喫煙しなかつたのですが、其後或阿片煙を好む友人と親んだ爲めに、自然と遂には癮になるまで吸み上げた、初めの程は餘り多量には用ゐなかつたが、後には一日増しに吸み方が多くなり、昨年になつたら、彼の顔に全く烟氣を帯びて精神も勝れないのです、私は彼の様子の大層悪いのを見て、私は彼れに申すに、私は汝に忠告するが、阿片はお止めなさい、猶喫續けたならばどうも恐らく宜しくなからう、私は上海から汝に忌煙藥を求めて來て進せやう、毎日汝はその藥方書に依つて服用せられたならば、漸々に自づと阿片を斷つのです、彼は私のこの忠告を聞いて直様承諾した、そこで私は友人に託して上海から數弗の忌煙藥を購求して、彼に送り届けた、又數日を経てから私は彼の召

多
餘計な世話ナ
ム

餘計な
世話ナ
ム

不
道理
起
那
年
下
新
年

九十六
使に逢ふたから、私は直ぐと彼が阿片を禁じたか何うかを尋ねた、彼の召使か言ふには、彼は一向忌煙薬を服用せず、此節は彼の喫み方が以前よりも更に多くなりました、これはまだしも構はないが、其後私が聞いたに、彼は或友人の家で話したのに、私が餘計な世話をやいて、何の理由もなく彼れに禁煙を勧め、彼は甚だ面白くなく、私の送つてやつた彼の忌煙薬も服用せずして言ふには、恐らくこの中には毒薬があつて自分を害する、そこでその友人は、この話を聞兼ねて、面責さるゝには、彼の言はれるその話は間違つて居る、他人か汝に禁煙せよと勧めてくれるのは、それは好意ではないか、人は又汝と仇もないのに、何か爲に毒薬で汝を害するものか、汝の言はれた此の話は眞に理窟に合はない、それから、彼はその友人にまでも腹を立た、今年新年になつても、彼は私には年賀にも來なかつた、彼れは私と絶交したことを私は承知しました、なるとこの様な氣質の人間か天下にまたと有りますか。

第二十六章

可
疑
的
事
腹
立
た
し
い
事
可
疑
的
事
腹
立
た
し
い
事
可
疑
的
事
腹
立
た
し
い
事

九十七
あなた、私は汝に一つの腹立たしいことを御談しします。何ういふ腹立たしい事ですか。私の識つて居る、あの親密なる江氏です、彼れは數日前外の人と申合して、私から數千吊錢の金を騙り取りました。彼は何うして、汝から其様に多額の金を騙取しましたか。先日彼は私の家に行きまして彼の申すには、彼の或知人が今宅で賭場を開いて居るから、私にも賭博をしに行けと、私は直に彼に隨いて行き、その家に行つて見た所が、七八人の人が皆坐つて賭博をして居つた、私は其人等は一人も見識らなかつた、彼は直ぐと私に紹介してくれ、彼は私に申すには、皆知らない人でなく、總て彼の知己である、そこで私は直に座に着いて賭博を仕初めたが、忽ち幾十吊錢を勝つた、やがて其場は離散してしまふた、次回には元來私は賭博に行かぬ積りで居たのに、彼は是非私に行けと誘ふ、私は證方なしに復た一度行つた、果して數百吊錢を負けた、彼は私に申すに、何んでもない、この後數回行けば直ぐと彼等から數千吊錢を勝ち得ますと、私は彼の語を信じて、又彼と同道して五六度行

賭博助定
賭博助定
賭博助定
賭博助定

賭博助定
賭博助定
賭博助定
賭博助定

つた又四千吊文餘負けました、彼等は賭博場を閉ぢてしまつて、毎日屹度二三人づゝ、私の宅に賭錢を要求に参りますので、私はかの江氏を捜しに行く、と彼は隠れて私に會はない、そこで私は二靴の衣類を質入して漸く賭錢を返しました、昨日になつて、或友人が私に告げますには、それはあの江氏が彼の數人と十分相談を遂げた上で、私を騙したのだ、何と腹立たしいではありませぬか。その江といふ人物は無論惡むべきだが、畢竟汝自身の好くなくないとも怨まなければならぬ、汝が若も彼に隨いて賭博をしに行かなければ、彼も汝を騙すとは出來ないのだ。此の御説は御尤ではあります、畢竟するに彼れは既に私と惡意な間柄であるのに、外人の爲を謀つて私を騙すのは彼も餘り人情を踏外して居るではありませぬか。汝がこの賭博場を設けて詐偽をした話をなされたので、私も汝に一つ御話します、私共の郷里で、或年數人の土地の無賴漢があつて一個の賭博を開いて全く他人を騙そうと企た、彼等の術中に陥つた人は可なり少くなかつた、その上皆亂暴極まる輩

背地裏、座チ外シ
座チ外シ
座チ外シ
座チ外シ

座下
座下
座下
座下

で、誰か、若も彼等に負けて、金で拂へなければ家や土地で償はなければならぬ、この様な不道理なことであつたが、私共の郷里に一人の資産家があつて、その人は大尉利發な人で、土地の人を待遇するのにも甚親切であつた、彼が開込まして非常に腹を立て、そこでその晩に彼自用车に乗つてその賭場に行つた、がその賭場に這入るやいなや、數人の無賴漢に會ふて、直に我は何某で態々此處へ賭博に來たと申された、大勢の者は之を聞いて、彼は當地の資産家であるといふことを知つて居るものだから、非常に喜んだ、彼等幾人の無賴漢は纏て竊に相談し云つたには、彼はだしぬけに來たのだから、自分達は先づ彼に初數回だけは勝たして歸せば、此後彼は來ることになる、そこで不意に一日一萬か八千を負けさせたらば、自分達はそれこそ金儲が出來ると十分に相談を遂げてから、坐に若き打ち初めたが、果してかの資産家は勝た、彼等は其場で直に金を拂ふた、その後かの資産家は又二度行つて又勝つた、又拂ふたのは現金です、或日の晩にかの資産家は復た行つた、宵から打始めて夜の

大天大夜
全ク夜ノ明ケキ
也
ソシ頃、天大明

回運去
取次ニ奥ニ行ク

幹其際的
何ヲ爲ス者、何

別初説
無稽ナルヲ吐
クナ
發聲
眩暈也、精神消
也
先見ノ明ナキニ
ハヘテイヘルナ
リ

便宜
不致目指
退去
逃ケ歸ル

刷白的
蒼白キ、血色ノ
悪キ様

關川水
無益ナル事ニ關
勾起來
惹起ス

京東
北京城東ノ數縣
ハ總テ一ト稱
スルナリ

兩下蓋
過雙方
銀ヲ渡ス

明ける頃まで勝負を續けたが、かの資産家は一萬餘吊文を負けた、全く夜が明けきつてから、かの資産家は彼等に言はれるには、私は先づ家に歸つて金を汝方に用意するから正午になつておまへ方私の家に取に來るが宜しい、彼等は皆承諾した、彼の資産家は歸つて行つた、正午になつて、彼等は二人出掛け、かの資産家の宅に錢を取りに行つた、召使の者か通ずるとかの資産家は直ぐと彼等を書齋に呼入させて、さて彼等兩人に、汝等は何者で私の處に何をしに來たかと尋ねた、かの兩人が申すには、汝は何うして私共を御見識り下さらないのです、私共は某處で賭場を開いて居る者です、汝は御忘れになりましたか、私は昨夜私共の處で賭博をして一萬餘吊文を御負けになつて、私共に今時分に金を取に來させたのではありませんか、かの資産家はこの談を聞いて、忽ち腹を立て、言はれるには、おまへ等兩人は馬鹿を言ふな、私は一個の資産家だ、おまへ無頼漢と博奕をしたと、しまへ等は眞に氣が狂ふたのだ、おまへ等は私を騙る積りで來たのだな、おまへらは全く眼先の利かぬ輩だ、

おまへ等兩人は疾く行け、それがおまへ等得の策だ、左様しなければ私はおまへ等兩人を役所に送つて、汝等の詐偽を處分するぞ、彼の兩人はこの話を聞いて、驚いて口もきけず直ぐと急いで逃げ歸りました。

第二十七章

老弟、汝は何うされたのです、顔色がその様に蒼白いのは、私は暫らく不快なのです。それは何うして不快なのです。私は他人の爲に一の無駄事に關係して居て、少し肝癪を立て、肝氣の病を惹起しました。誰の爲に無駄事に關係して、何の肝氣を起されたのですか。

前月私共のあの親友なる温子山が、私へ彼れの地所買を頼まれました、私の知合に一人京東の者で孫氏と云ふが有り、一頃餘畝の土地を賣らうとして居る、そこで私はその孫氏を連れて行つて温子山に面會させ、其後彼等兩人は京東に行つて土地を檢分した、歸つて來て私へ中人になつて彼等の爲に直段の話を付けて呉れと頼んだ、相談のついたのは一千兩で雙方ともそれで承諾して、即ち昨日契約書を認め、金錢の

大前兒個
一昨朝
早朝

對不過
面目ナシ、氣ノ
難
情有可原
情ニ於テ厚録ス
安心
不安
信
占メ、占領
人家の便宜
他人ノ利益
對不住
對不過ニ同シ
越前越前
思ヘハ、思フ程腹
立タシ

分岐
利益配當
短
不足
嚙可老説
口ニケハ始終言
フテ居ルガ
不提
再ビ言ヒ出サセ
吃野
損チナル
走現成的理
親戚ニ接スル道
上杭
火床也
トハ就事ノ意
白事
喪葬祭記前ノ
一也
黙々夜
徹夜、通夜
道乏
勞チ積フ、勞チ
困ス

受渡をすることに極めた、一昨昨日になつて私は早朝かの孫といふ人と同道して温子山の宅に行つた、彼の家に行つて見た所が彼は未だ起きて居なかつた、私等兩人は其儘書齋で稍暫く待つて彼は漸く起きて来て、彼が私等を見ると彼が申すには、かの土地は彼は買ふとが出来ぬ、私共は何故買ふとが出来ぬかと尋ねた、彼申すには彼は漸く金を集めたが一千兩に満ない、私等は幾何程金が集つたかと尋ねたら、九百五十兩だけは出来たと答へた、かの孫氏はこの話を聞いて、それでは九百五十兩あらば、それだけで宜しいと言ふた、そこで契約書を認めて金錢の受渡を済した、彼は私の孫氏に對して氣の毒でならぬことになつた、彼が若も果してその五十兩の金が集まらないならば、それはまだ情に於て恕すべき所もあるが、彼れはあの様な資産家で、五十兩はおろか縦令五萬兩でも出来るので、私は實に彼を怨む、彼は平氣で他人の利益を占め、私に對して氣の毒の思ひをさせる、私はその日家に歸つてから、思へば思ふ程腹が立つて、遂にこの事から私の舊病を惹起して

かく不快なのです。 汝は御存じないが、温子山の弟は彼よりも一層惡いのです、以前彼は始終私と仲間で商賣をして居た、凡そ彼れが手を經て賣る商品は、利益金を配當する時になると、彼は何うしても私に多少少く分けてくれる、私が彼に要求し兼ねると承知して居り、彼の口先きで常に申すには、此度は汝に二吊或は三吊不足ですが、一兩日中には御理合せをします、それから何時まで經つても言ひ出さない、日數を經ると私も忘れてしまふて、その事は立消えです、彼が斯ういふ風に少しづつ引込んであの數年間に私は何うしても數百吊文の損を食はされた、その外若も外面で朋友の交際親戚の往來の道理をも講ずれば、彼れは一切解りませぬ、彼は唯女寐ては女起きては金の二つを知つて居るのみで、まわ斯ういふ風の間人です、去年彼の家に凶事があつた時、再三私に二人の友人と一齊に自分の宅へ通夜をする相手に来てくれと依頼したので、私は二人の親友を頼み彼れを助けて五六晩通夜をした、その人等は眞に心を盡して世話してやつた、事果て、後彼は一向その

没理人家
物ヲ知ラズノ人

更好
放利ノ名聲
高利剝取ノ評判

受熱
中暑
驚愕
驚愕恐怖

人等の宅に禮を述べに行かなかつた其後或日途中でかの人々に出遇ふたが彼は唯頭を下げたのみで通り過して行つた全く義理の解らぬ男ではありませんか。なんと此種の人間は如何酷ひなのでせう。近頃は私の聞くの更に甚しいのです。彼は宅に居て高利貸を爲して誰でも彼の錢を借れば皆八分の利息、世間では既に高利剝取との評判があるのです。私は疾から見ぬゐて居ます。彼の様な資産家は失敗します。古人の言にも刻薄の家には永く其の榮を享くると無しといふてありますが、これは定まつた道理です。

第二十八章

老弟、私承れば、汝方の令弟が御歸へつて來られたではないか。何故まだ出て見えないのです。彼は歸つて來て直に病氣に罹りました。何うなされたのです。道中で暑氣中りをなされたのですか。中暑ではありません。それは少し驚かされたのです。何で驚かれたのですか。それは船中で盜賊に出遇ふたのです。汝、私に御聞かせ下さい。それ

河在
火把
刀槍
槍頭
指サシツケ
編笠
排置
夜具
幸福ニモ、幸而
銀匣子
財布
早路
馬頭上
起早
夾着
時今
時候ノ障リ、時

は何うして盜賊に遇はれたのですか。彼は一人の友人と同伴して回つて參り兩人にて一人の従者を連れ一隻の船を雇ひました。或夜船は某處に碇泊いたし、夜半頃になると突然濱邊から十幾人の賊が來て各松明、刀、錢砲などを持つて、船中に入込來て、刀で船板を切り開いて、船房に闖入して來て、又物を私共の舍弟に指しつけ、全體如何いふ物品があるかと問ふた。私共の舍弟が申すには私共の品物は總てこの船房内に排べてあり別には無い。そこでその賊等は直ぐに袍や風呂敷包や金錢などを悉く奪ひ去つたが、蒲團だけは殘して行つてくれた。幸にも私共の舍弟の體だに一つの財布があつて内には幾兩の金と猶數十兩の銀があり、それは失ないませぬ。夜明けになつて彼等は或波止場に着いて私共の舍弟は彼の友人と相談して船から下りて陸行を企てた。彼の友人も非常に持成した。そこで彼等は蒲團を運び卸し、波止場に行きて二輛の車を雇ひ、直ちに陸から歸つて來ました。家に若くや否や病付きました。醫師を迎へて見せると彼は驚いた爲に逆上したのと、少し時候

既開丁
約定ノ意

全不
全ク關係セズ
即シテ(車ヲ)

黒店
賊ノ開キ居ル店

はそれは斯ういふ相談であつた、今夜深更になつてから、汝と私と二人が行つて、かの二人の馭者を殺し又番頭様達三人は、かの二人の客との二人の従者とを殺しに行くのだ、私は已に番頭に斯う約定して置いた、ことの成就した後には、かの二輛の車を私共兩人へ一人へ一輛を分けて下さい、かの二人の客が如何程金子を持つて居らうとも、私共二人は全く聞せぬ、私の丁見は斯うだ、我々兩人がこの二輛の車を分け取つたら、明早朝我々は商賣を退めて各自一輛の車を御して早く家に歸り行き、今後は吾々兩人とも足を洗ふて眞面目と成り、もう今後あの人を害するやうな事を爲ぬのだ、なんとこおしたらばどおだ、前の一人が言ふには如何にもそれは至極妙だ、話しがすむと彼等兩人は表の方に行くのを聞いた、私共先伯は心で黙き、道理で自分があの幾人の店員はどらも賊面だと疑ふだか、果して眞の此れは盜賊店だ、そこで直ぐと厠を出で自身の部屋に行つて直に今聞いた所の話を皆彼の友人に告げた、かの友人はこの話を聞いて非常に恐を抱いて一同は丁度部屋の内で、

直
頻ニノ意

就見
忽見也

網車
旅客保護車、
護衛付ノ車

保護的者

全上下車
馬ニ車ヲ付ケル
ナイフ、取テ仕
立ソ

村莊兒
村屋、邑

小財主
小金持、小資産
家

好
救助ノ意

功徳ナル行爲、
熱善ノ行ヒ
男人

如何はせんと途方に暮れて居る處に、忽ち數輛の車が来て、頻に店の戸を叩くのを聞いた、門が開かつて見ると六輛の護衛車を挽入れて來り、即ち二人の旅客と四人の護衛者とであつた、私共の先伯は直に言つた、これで心配は要らない、吾々は最早安心して眠に就いて宜い、そこで又一人の従者を遣して彼處で護衛者に問ひ合すと、彼等が言つには、明朝四時の出立である、私共の先伯方も四時まで寢て起き出で、馭者に車の準備をさせ、懸て護衛車と一所に連立つて行つた、斯くして僅にその大難を免れ得た、なんと危険ではありませぬか。

第三十章

貴下、汝私が貴方に御談しする一つのことをお聴きなさい、私共のあの村内に住んで居る或一人の小資産家は平生甚しい吝嗇家で、從來他人を救はず慈善をしない、數日前一人の他家に嫁入つて居る妹が、雨を冒して彼の家に來て言ふには、彼が夫は今度或船の會計員となつて二日前に出帆して航海に出た、目下家には食事をする蓄へがありませぬか、

加不了
得メ
哭
既也、或泣也
既同
泣ケ
立腹シテ

請過米
來テモラフ

輕作
爲也
コソヒナス、伴

挖窟窿
穴ヲ切開ケ
聞味
賊ニ福シ

珍頓
宜イ氣味ト嘲ル

誰知道
圖ワズモ、思ヒ
出ケナクモ
下夜の兵士

招丁
白狀サシタ
役所ノ小吏、小
使ノ如キモノ今
事主ニ小使ト譯ス
領事者
領品ヲ受取ル、
取盗マレン物ヲ受

ら、それ故に雨を冒して一石の米と、幾兩の金子とを借りに來ました、彼の夫が歸り次第必ず總て返します、此の人はこの話を聞いて彼の妹に言ふには、彼れは米も錢も無い、出來ない、おまへは他處へ借りに行きなさい、かの妹は彼が掛ふて呉れないのを聞いて泣き出した、彼は妹が泣くを見て、忽ち邪魔がり外出して避けてしまつた、彼と同じ邸内に住んで居る一軒の隣家が有り、それは快活な人で、彼が妹の事を構はないのを聞いて、非常に腹を立て、そこでかの妹を呼び入れて、一石の米と幾兩の金子とを貸與へ、その上又彼れに一匹の驢馬を雇ふてやり、そして彼れを送り回してやつた、此者が歸つて來るや、彼の家内の人はかの隣人が、彼の妹に錢と米とを貸し與へて送り回したと云ふを聞いて、彼は善とも惡とも言はず、知らぬ素振をして居つた、丁度その夜一人の賊か彼の後の土堀より一つの穴を明けて、彼が屋内に入つて、彼が數十兩の金と數枚の衣類とを盗み去つた、翌朝になつて、彼は竊盜が物を盗み去つたといふことを知つたが、彼はかの妹が彼が金錢衣類を竊み去られ

た事を聞いたならば、必ず好い氣味だと喜び、又必ず自分の處に様子を聞きに來るだらうと、それを恐れて、それ故彼は役所にも盜難届をしないうのみならず、彼れは又同邸内に住んで居る近隣にも家に賊が忍び入つて物をなくした事を、外で人に告げてくれなと頼んで置いた、思ひがけなくもかの賊は、その夜彼の物を盗み行き、生憎大通へ出た時に、夜廻の兵に捕はれ、役所に拘引せられた、役人はその賊にその金錢と衣服とは、それは誰の家で竊み出したかを訊問したが、その賊は直に白狀して、某村の某家から盗み出しましたと申し立てた、そこで役人は直に小使を遣して、被害者に贓品を受取る爲に出頭せよと達した、此人はこの沙汰を聞いて難儀だと感じたには、役所に贓品を受取に行かぬ譯にはゆかず、役所に贓品を受取に行けば、又かの妹がこの事を聞き知るだらうと心配し、そこで彼は一策を案じて、かの同邸内に住んで居る彼の隣家に自分の名を言つて役所に行き、彼に代つて贓品を受取ることを頼んだ、彼の人は直に承諾して彼の代りに行つた、かの人は前日彼がその妹

馳不起
有故意
收拾
堅く、瞋ッ

親妹
肉身ノ妹

百十二
を救助しなかつたので非常にその人を蔑視して居る所から故意に彼を懲らしくれむと、役所から金銭と衣服とを悉く受取るや、かの人は直にそれを彼の妹に送つてやつた家に歸り、彼に會ふと虚言を吐いて言ふには、私は今役所から出て市中に來た時、丁度令妹に御目に懸つた、令妹は私に何處に行かれたかと尋ねられたから、私は役所へ行き、汝の代りに金子と衣類とを受取りに行つたと云ふた、すると彼れは私にその金子と衣服を呉れと言はれた、私は彼は汝の肉親の御妹なれば差上られないと斷はり悪く、そこで私は悉く彼れに進げました、此人はこの話を聞いて腹を立てられぬばかりでなく、却てかの人に禮を述べなければならぬ、目下世間で皆この話を聞き、彼の人は眞に愉快なる人で、氣味のよき事をしたと言ひ囃します。

第三十一章

汝がこの慳吝人が報いに遭ふた物語をせられたので、私も汝、一つ御話しをする、或年私が南方の或旅館に宿泊した時に、その店に一人の山西

窮人
貧窮者

流落
流離落魄、オチ
ブレル

併貸
商業用、商品仕
入

爲力
補助

掉眼涙
落涙

の旅商人が宿泊して居た、或日突然一人の貧乏人が來たが、やはり山西人で着て居る衣服は非常な襤褸で、店頭へかの旅商人を尋ねて來た、店員は聽てその者を案内して來た、かの旅商人を見ると直ぐに云ふには、只今私は此處に零落して居ます、旅費が無いので家に歸ることが出来ず、困り果て、居るので、昨日吾々の或同郷の友人が、汝が當地へ貨物を仕入れに來て此旅館に泊つて居らるゝと私に話しました、私は聞くと非常に喜ばしく、それで今此處へ訪ねて來ました、何卒御同前の以前の交誼を想ふて、一百兩の金を貸して下されたし、私は旅費として家に歸ります、私に家に着いた上は何とか方法をつけて汝に返済します、その旅商人はこの話しを聞いて言ふには、私の金は既に商品を仕入れてしまつた、目下自分の手には一兩の金も無い、汝は他に方法を考へなさい、私は眞に力に爲ることが出来ない、かの貧乏人は彼が世話が出来ぬといふのを聞いて、忽ち涙を流して居つた、その間にかの旅商人は奥の部屋に入込んで仕舞ふた、丁度その旅館に住んで居る一人の四川人が

傷心、慨ク、
當年、前年
以前、前年

窮空
損耗
郷況
同郷ノ親シミ

借約
借用證書

其部屋へかの旅商人と閑談をせうとて尋ねて行つた彼の貧乏人が椅子に掛つて泣いて居るのを見て、聽て彼に何故に悲むかと尋ねた、彼が言ふには、この旅商人は元來同郷で私の直隣人です、彼が以前貧窮せし時、私は常に彼に錢や米を施し、後に私は又彼に金を貸して商賣をさせました、目今彼れは貰け出しました、私は當地で商賣をして損をなし、家に歸る旅費も無くなりましたから、彼を尋ね参り、一百兩の金子を借して呉れ家に歸るからと、彼は貸してくれませぬので、それ故私は悔んで居るので、その四川人はこの話を聞いて直に奥の部屋に行つて、かの旅商人に問ふには、汝この御郷里の人が前年汝を扶助したことがあると物語りをした、が眞實ですかと、かの旅商人が言ふにはそれは全く眞實ですが、如何せん私は今彼れに貸す金が無いのです、かの四川人はそこで言ふのは、それでは假に私が今汝に一百兩の金を貸し、汝は彼に給へて旅費に充て回えらしてやり、汝は一個月の後に私に返へすとして一枚の借用證書を認めなさい、私も利息は要らない、汝は望まるとか

勉強
止ムヲ得ズ、ツ
トメテ

收起來、受取
搬了走
引越ス

道徳
ココニ於テ初メ
術士
テノ意
搬運術使
咒ニ物ヲ拔取ル

打
放
一
發
砲

何うか、彼は餘儀なく望むと言つた、そこでかの四川人は直に自分の部屋から、一百兩の金子を持つて來て彼に貸し、彼からかの貧人に給へて持せてやつた、かの四川人は直に彼に一枚の借用證書を認めさせて、受取つた、其後二日を経て、かの四川人も引越してしまつた、又數日を経てかの旅商人は靴を開けて見たら、一百兩の金が不足し、自分が曩に認めたかの借用證書が箱の中に有つたので、彼は此時始めてかの四川人は魔術使で、抜取の術を知つて居て、かの一百兩の金を抜取り、かの貧乏人に持歸らしめたのだなと悟つた、其後矢張り彼の旅商人の一人の従者の口から洩れたのです、皆が聞いて好い氣味だと言ひ囃した。

第三十二章

汝、私は令弟が他人と訴訟を起して居らるゝと聞きました、が眞實ですか。左様眞實です。何人ですか。それは御同前のこの驛の一人の無頼漢とです。何ういふ事件で。それは、或日私共の舍弟が、この驛外の北方の森の中で銃で鳩を打つて居ました、彼が發放つと、

站立

冷孤丁的
不意ニ、忽然

霧中去
驚キ逸失ス

拵住

不川着念

紅顔色
栗毛

好辯

處辨シ易シノ意

思ひ掛けなくも、森の外に或人が一頭の馬を率ゐて佇んで居たが、その馬は不意に一發の銃聲を聞き驚て驅け失せてしまつた、その人は承知せず、舍弟を捉へて、馬を償へと迫つたが、私共の舍弟は彼に言ふのに、汝は噪ぐに及ばない、その馬は何方へ驅けて行つたか、彼は西北の方へ驅けて行つたと申した、又その馬は何色かと問ふた、彼は栗毛だと申した、私共の舍弟が申すには、此事は容易に相談のつくことぢや、私は今汝と同道して宿場に行つて、汝に對して一人の受人を立てます、汝はまづ先に行つて馬を捜しなさい、若も今後馬が捜し當らず眞に失せたのならば、私は汝に馬を償へば宜いではないか、彼はそれを聞いて大層喜んで承諾した、そこで舍弟は彼と共に宿場に行つて、彼へ全順といふ穀物店を證人に立てた、彼は先づ馬を捜索に行き、私共の舍弟は直に家に歸つて來ました、暫く時を経てかの人は全順穀物店に參り、彼が申すには彼の馬はなくなつて捜し出せぬ、私共の舍弟に面會したいと、そこでその穀物店では直に小僧を遣して宅へ參り、私共の舍弟を喚んで行つた彼

見候情
情ヲ汲ムノ意

没下落
行衛不明

便是
即也

吵翻起來
口論ヲ初メタ

堂上
衙門内會審室、
訊問所

は舍弟を見るや否や申すには、私は行つて暫時搜索しましたが、私の馬は全く見えませぬ、私のあの馬は當初六十兩で需めたのですが、今私は情實を汲んで、汝は私に五十兩だけ償ふて下さらばそれで宜しい、私共の舍弟の言ふには、汝のやうに少し捜したばかりで見えないと言ふのは、それは尙眞に失せたとは斷定が出来ない、汝は私が更に諸方を搜索し來るのを待つて下さい、若も一兩日経ても、あの馬の行き方が不明であれば、それは眞に失せたのだ、その時になつて私は汝に賠償をしても遅くないではないか、かの人は承諾をせず、彼れは即座に賠償せよと迫つたので、私共の舍弟は彼と爭論を初めた、皆の人が仲裁をしてくれた、思ひ掛けなくも、かの人は巡檢衙門へ行き、舍弟を告訴したので、役所の人か舍弟を拘引して行つた、彼は法廷に登り直ちに本件の事實を有のまゝに申立てた、巡檢は舍弟に五日の猶豫を與へて、かの人の馬を捜して來いと命じた、そこで舍弟は各村落に就いて、一々尋ねたが、遂に尋ね出した御同前のこの驛の西北に當る處の或村に住む趙といふ人が、

銃聲
道上
道に付ク

見証
証言

打板子
苦ノ刑也

發
送也、渡也
笑話兒
可笑シキ談

二日前に一頭の栗毛の馬を買つた、そこで舍弟は直にその趙といふ人の許に訪ね行つて問ふたが、果せるかな彼の人は、數日前に彼のあの馬をか、の趙といふ人に賣渡し、八兩で手を打ち、即ちその日にかの人は趙方へ馬を率ゐて行き、金を受取ると約定したが、その日かの馬は銃聲を聞いて驚いたではありませんか、後からかの人は追付いて、趙氏の許に送り届け金を受取つて來た、彼れはそこで舍弟に申すには、彼れの馬はなくなつた、彼に五十兩の金を辨償せよ、そこで舍弟はその趙といふ人に申入れ、馬を率ゐて、自分と一所に役所へ見證に行つた、かの人は證據が有るのを見て一語をも吐き得ず、自分が詐僞せりと白狀した、巡檢は彼が餘りに狡猾な詐僞であるから、直ちに四十の打き拂とした。

第三十三章

汝、昨日私は榮發店に行つて聞きましたが、汝の御店からあの店に一百包の棉花を送られたが、一包の棉花が不足したといふことですが、何うして不足したのです。 汝がこの事を言ひ出さるれば、それは可笑し

傳
申、籤

拾棉花的
棉花ヲ擔フ人夫
好大半天
數時間、餘程ノ
間

詭異
奇怪、怪評
有氣的樣子
立腹セル様子
不留心
不注意

箱
數也

い話なのです、昨日私があの店に棉花を送る前に、先づ一百本の竹籠を用意して置いて、一包の棉花を渡す毎に、私共は人夫に一本づゝ渡してやつた、一百包の棉花は總て渡し了つた後、餘程時間が経つてから、榮發店の王番頭は使を私の店によこして、私共に何故彼方へ一包の棉花を少なく送つたかと尋ねて來た、私共は直に言つたには、私共が御送り申した棉花は一百包だ、それに何うして一包不足して送つたと言はるゝか、その人が言ふには、彼等の店には棉花は九十九包の棉を受取つて、一包の棉が不足だ、私はこの話を聞いて大へん怪しんだ、そこで私は直にその人と連立つて、彼等の店に行つた、王番頭は私を見るや、怒氣を含んだ様子で言ふには、汝方の店の手代等は甚不注意だ、何うして私共の店に一包不足して棉花を送越すことになつたのです、私は直ぐと問ふた、汝はどうして私共が一包の棉花を少なく出したことを御存知か、彼が言ふには、私共は棉花を受入れて籤を算へたが、九十九本であつた、これは汝から一包少なく送越されたのではありませぬか、私は彼等に問ふ

方機
今シ方、先刻

止子疼
腹痛

檢起來
拾ヒ上ケ

不要緊
構ヒナシ
太付失
大過失
不得助
面目ナシ
盤一盤
檢査チスベシ

百二十
た今し方御店では誰が籤を受取られたか、直ぐ傍に立つて居た一人の手代が、私が受取ましたと答へた、私はその者に問ふたには、汝は今し方籤を受取られた時、他の處には行かれはしなかつたか、彼が言ふには、私は格別何處にも行きませなかつたが、唯突然私は腹痛を覺えましたから、便所に行き大便秘しました、そこで私は彼れに申すには、吾々兩人は先づ、便所の内を捜して見やうと言つた、私は彼と同じに便所の内に行つて見た所が、土間に一本の籤があつた、私は直に拾ひ上げて、王番頭に見せに行つた、私が申すには、結局誰の手代の不注意か、汝方の手代が便所の内に一本の串を落して、汝は私共が汝等に一包の棉花を少なく渡し、たと言はれた、其實これは何でもないが、つまり汝が余りに輕卒なので、彼はこの言を聞いて甚面目なげに一語も出なかつた、私は重ねて言ふに、この籤は搜し得たなれど、結局御同前は更に貨物の數を檢めて足るか足らないかを調べたならば、互に一層安心が出來ます、そこで私は直に向ふの手代等に棉花の包を、倉庫から復び總て庭に運び出させて、

對了
川邊ナシトイフ
忘

問答
返却ノ印

管帳的
店會計員
無稽也

百二十一
丁寧に數を數へ、相違なく一百包の棉である、そこで私が申すには、汝方皆見られたか、間違ひはないですか、彼等が申すには、皆見ました、合ふて居ます、そこで私は直ぐ歸つて來ました、汝は何と可笑しくは思ひませぬか。私は以前汝に話したとがある、あの王番頭は道理の分らぬ人間だと、汝は猶餘り信じられなかつた、何處を捜したとて彼のやうに唯籤を數へたばかりで、貨物の數を檢めもせず、直ぐと汝が少なく、彼等に一包の貨を渡したと云ふ理窟がありませうか。汝は未御存じないが、去年斯ういふことがありました、私はあの店から一百兩の金高なる貨物を買ふて、彼等に一枚一百兩の銀の手形を渡しました、二日経て、彼はかの銀の手形を戻しに來て、これは賈札だと言つた、私は手形を見たが一向に消印がない、私は直ぐと問ひますに、既に賈札となれば何うして消さないです、彼が言ふには、本店に行かないから、それ故消してないのです、私は又彼れに問ふに、本店に行かずにおいて、何うして賈だと分りますか、彼が言ふには、彼等の會計員が賈札らしいと鑑定した、私はこ

竟自
元來ノ意
磨不開
面目ヲ失セル領

退還
憑キ手形、賈札
ヲモイフ、通用
セザル手形

戮子
收捺印、刺印
手形ノ裏面ニ
ル銀行ノ年月日
某銀行發行ナド
ト記入シ其ノ真
貨任タルノ証トシ
タ明ニスルトシ
入チ收號トイフ
ナリ

の語を聞くと甚だ解が分らない、依つて申すには吾々兩人はこの手形を持つて、銀行に金を受取りに行き、賈であるか否やを慥かめやう、そこで我等兩人で銀行に行くと、もとより賈でない、金を引出して来た、その時彼は面目なく赤面して、現金を持つて歸つて行きました。

第三十四章

番頭様こゝへ一枚の不渡手形を戻しに來ました。持つて來て、私に御見せなさい、この手形は私共から出たものではありませぬ。何して汝の處から出たものでありませぬか。この手形には私共の見證がありませぬから。私は實際汝の店から受取つたものと記憶して居る、何うして今汝等は汝方から出たものでないと言はれますか。私は汝に御談しますが、若も私共が出した手形ならば、必ず私方の見證と私共の印判があります、今この手形には見證もなく又印判ありませぬ、何うしてこれが私共が出したのでせう。汝は汝方の見證がないと言はれるが、私はこの手形を受取ましたは汝方です。唯汝が私共か

也許
政者也、事ニ目
レバノ意

母
北京市中公然開
店セル銀行ト
暗トハ即チソノ
行ハ即チソノ
トハ即チソノ
ニ開店シツ、ア
ル銀行チイフ故
ニ人皆之ヲ使フ
スルナクハ公母
母也俗者公母之
母以不好爲母云
認苦子
給破痛ナ忍アノ意
推イテ下サイ
(小札ト)

ら受取つたでは好い、けませぬ、是非私共の受取つた先がなければなりませぬ。縦令汝方の見證があつても、汝方も今認めなければ、私は詮術がない。承認しない理はありませぬ、若も私共が出したものであるならば、私共も又更に前に受取つた先へ返しますから、私共には何も損をしないのですから、何も認めないことはありませぬ。事によつたら、この手形には汝方受け忘れたのではあるまいか。とんでもないこと、私共は決して受け忘れはありませぬ、これには猶一つ理由がありませぬ、私は御話をしませう、この一枚の小さな錢屋の手形です、私共の店では從來小さな錢屋の手形を使用しませぬ、それ故一層私共が差出したものでないといふことが知れて居ります。汝方が若も是非汝方が出したものでないと言へば、それは仕方がない、只私は我慢する斗りです。私が申せば、汝は持歸つて、更に誰れが呉れたのかを御考へなされるがよろしい。汝はこの十吊の錢札を、一吊のを五枚と五吊のを一枚とに割つて下さい。一吊一枚のは私共當店のはありませぬ、他の處のに

點點、檢也
點點、檢也

熱動
巡檢衙門
警察署

跟去
隨行

忽見
忽見也

換へて上げてても宜いですか。他の處のに換へても宜しい。汝檢めて下さい、合ひましたか。違ひなし、合つて居ます、この手形には汝方皆見證しましたな。皆見證しました。

第三十五章

大哥、私は今方宿場で、一の騷動を見て來ました。如何いふ騷動を御覽でしたか。一人の南方人が一人の當地の人を捉へて、巡檢衙門に訴へに行きました、その後へ數多の人が隨いて居り、私も何事か承知しなかつたので、そこで私は彼等に隨いて役所に行き、彼等は何事であるかと見ると、彼等兩人の役所に着くや、かの南方人は直に役所の小使に彼等兩人は訴訟があると申入れた、その小使は直に彼等兩人を内に引入れた、私も隨いて這入つた、見ると巡檢は法庭に着き、彼等兩人は法庭に出て、直ちに皆な跪いた、巡檢は先づかの南方人に汝の名は何と呼び、何處の者で何ういふ事情で、告訴に來たかと訊ねた、その時かの南方人は頭を地に叩き申上るには、私の名は俞配と呼び、江西臨江府の者で、當

成衣師
仕立屋、裁縫師

對着
對面也、只閉門不
開也

打茶團
茶見、白看

嘴巴
口元

回手
手向

爪
爪ニテ抓ク

地で仕立屋を營んで居ります、私は昨年當地で一人の妾を買ひ、この驛の燈籠胡同に二間の家を借りて住はせてあります、先刻私は店で仕事を作て居まして、一人の弟子を遣はし宅へ物を取り、に遣りました、彼れが歸り來て申しますには私の宅に一人の若者が座り込んで居たが、彼は見識らぬ人であつたと、私はこの語を聞いて甚奇怪に堪へず、直に急いて宅へ見にまいりました、私が宅へ行きて見ますと、門扉が締めてありました、私は門を推開けて内に這入つて見ますと、この内で座つて茶を喫み私のその妾と話したり笑たりして居ました、私は彼に汝は何人で私の宅へ來て何をなさるのかと尋ねました、彼は私の家へ素見に來たのだと答へました、私はこの一語を聞いて、忽ち腹を立て、その口元を殴りましたれば、彼は私に手向ひをして私の顔を抓きました、依て私は直に彼を引張り出して、告訴に來ました、何卒御役人には彼れは全體私の家へ何をしに行かれたかを御尋ね下さいませと、そこで巡檢は直に一方の人に汝の名は何と呼び、何處に居住し、何職で、俞配の家へ何を

放印子 日歩ノ金ヲ貸ス
爲ハ爲スノ意
生業トナスノ意
印子 利息ノ意、通帳
ニ何日ニ利息何
租領收ナドト認
ルモ其都度捺印ス
クイフ
摺子 通帳ト譯ス

一膳出子の鼠
クワツト喚キ上
ケタル所
證著 ミハリ

上丁鼠
喚キ上ケ

しに行つたと訊ねた、その人の言ふには、私の名は王安と申しましてこの驛の紅竹胡同に居住し、平生日歩の金を貸して生業として居る者ですが、兪配のこの妾も當初私と同じ邸に住ひして居て、二ヶ月前彼の此妾は私から銀十兩の割付金を借りました、毎月私は彼の家へ割付金を取りに行くのです、今日は又期日ですから私は通帳を持つてその家に行つたのです、彼の此妾は私に内に入つて茶を喫めと言ひましたから私は這入つたのです、彼は割付金を私に渡し、その後で又私に一碗の茶を煎れてくれました、私が丁度内に座つて茶を喫んで居た時に兪配は家に歸り来て、私を見てくわつとせきあげた様子で、兩眼を見張つて私に汝は誰で、自分の宅へ何をしに來たかと尋ねました、私は彼の言の餘りに禮を缺くのを見て、腹を立て彼の家に素見に來たのだと答へました、彼はこの言を聞き直ちに私の口元を毆打しました、私もせき込み手向ひして彼の顔を掴きました、そこで彼は私を捉へて告訴に來たのですと申立了つて、直に割付金受取の通帳を出して役人に示した、巡檢の

不准
許サズ

申されるには既に兪配はおまへが彼の宅に行くのを好まない、から汝は今後毎月彼の店へ利息を取りに行くがよい、再びおまへは彼の宅に行くことならぬ、汝は若も再び彼の宅に行つたことを兪配が訴へ出たならば、屹度汝を相當の罰に處すると言ひ渡し、聽て彼等兩人を引取らせました。

第三十六章

私は汝に一件話す事がある。何事ですか。近頃私は旅から歸り來る時に、或日一の大なる驛の旅館に宿泊しました、その旅館の番頭の談を聞いたに、數日前その驛に徳成といふ兩替店があり、或日一人の者が一個の腕輪を持つてその兩替店へ賣りに行つた、其兩換店の者が一の秤を持ち來て、その腕輪を掛けようとして居た時に、又一人這入つてその腕輪を賣る人に向つて言ふには、今し方私は御宅へ金と手紙とを持つて参りました、御宅での話に汝は街に行かれたとのことでしたから、私は直に市中へ汝を捜しに來まして、丁度この店に御出になるを見

腕子
腕輪
秤子
秤天也
遺ル、秤也

起債裏
懐中ロリ

銀信
金子封入、書信
接過ス

前頭
前ノ方、冒頭
平安無事

不
景也、秤也

付ましたと言ひつゝ、懐中から一封の手紙と一包の銀塊とを取出して申すには、これは浙江から来た手紙と銀塊です、かの腕輪を賣る人は金と手紙を受取てその使の者に一百文を與へた、その使の者は直に歸つた、その後でかの腕輪を賣る人は直ぐと兩替店の人に言はれるには、今私の弟が浙江から、私に銀塊を送越しましたから、私はその腕輪を賣りませぬ、私はこの銀を汝方に賣りませう、まだ一事あるのは私は字を識りませぬから、何卒汝方この手紙を開封して私に讀んで聞かして下さい、そこでかの兩替店の人は、かの腕輪を彼に返して、その手紙を開封して彼に讀んで聞かしてやつた、前の方は旅に在て無事だから安心あれと言ふに止まり、後段には現在先づ十兩の銀を送るから、何卒御使用下さい、後は序の人のあり次第更に多額の金子を送りますと書いてあつた、そこで彼の人は直ぐ申すに、汝方この十兩の銀塊を持って行き目方を量つて、悉く現金と引替へて下さい、彼の兩替店員は直に持ち行つて量ると正に十一兩の銀であつた、心中大ひに喜んで一兩だけを秘し、即十

合好
勘定、兩替ノ意

騙子手
詐偽師、騙者
カキテ

夾剪
決り

兩だけを現金に引直し彼に渡した、かの人は直に持つて行つた、程なく又一人這入つて来て札で金を取り、そして兩替店員に向つて言ふには、汝方は謀計に乗つた、今し方あの銀塊を賣つた人は詐偽師だ、彼が汝方に賣つたのは、あれは贋銀だ、汝方は何うして彼に騙されたか、かの兩替店はこの話を聞いて直に鉄刀で銀を切り開いて見ると、いかにも偽であつた、そこで兩替店の人はこの人にかの詐偽師の住所を知つて居るか、と尋ねた、この人の言ふには、汝方が若も私に金子を下さるならば、私は直に汝方と連立つてあの人を搜索に行かう、そこで兩替店の番頭は直にこの人に一吊文を與へて、彼に自分等を連れさせて、かの者を搜索に行つた、この人は一吊文を受取つて、兩替店の者二人を伴ひ出掛た、彼等が或菓子屋の門口まで来ると、この人は即ち兩替店の彼の兩人に言ふには、汝方御覽なさい、かの詐偽師が菓子店で菓子を喰つて居ります、汝方自身に這入つて彼れを尋ねに行きなさい、この二人の兩替店員は直ぐとかの包んたる偽銀を持つて這入つて行た、かの詐偽師を見て直

天平
天秤也

言ふには汝が私共に賣つたこの包は偽銀です、かの人が申すには私もその銀が偽であるかはいかには知らない、それは元來私の弟が外から送越したのです、それがはや偽とならば、私は汝方に金子を返せば夫までの事です、そこでその人は直ぐに菓子店の番頭に頼んでその包の銀を掛けて下さい、十兩であるかどしだか、その番頭が銀を受取り、天秤の上で置いて、量り申すには、これは十一兩の銀です、かの人は此の語を聞き、直にかの二人の兩替店員に言ふには、私が先刻汝方に賣渡したのは、それは十兩の銀で、今この包の偽銀は此れは十一兩だ、それが何うして私のですか、汝方これには別の偽銀を持ち來て私を騙しに來たのだ、兩替店の彼の兩人は斯く言ふを聞きながら、何んの言葉も出なかつた、其時幾人か別に菓子を喰つて居たものが、この事を聞き皆不平で、總勢でかの兩人の兩替店員を打たんとした、かの二人は詮方なく、大急ぎで、かの包んだる偽銀を持ち逃げ歸つた。

第三十七章

田名
有名

打扮
イデマナ、風體
宅門子
大家
太夫人

受過來
受取
菓子
腰掛

この詐偽師の事を話されたので、私も汝に話す事がある、數年前私共の郷里に方氏と呼ぶ、一人の有名なる醫師が、ありました、彼は身には一つの名譽もあり、家も可なりの財産富み、毎朝宅診の患者は必ず數十人あつた、或日の朝一名の人が來た、打扮は大家の從僕の様であつた、方醫師に面會して言ふには、私は某邸に居る者ですが、當時私共の檀那も奥様も皆病氣ですから、汝の處に診察を願ひに見える筈です、何卒先生明朝は御宅で御待合せを願ひたい、うります、方醫師は承知と申された、翌朝になつて、かの從僕が又來て別に一人の伴れがあり、手には風呂敷包を持つて居た、彼の從僕は入り來り、方醫師に問ふて申すには、伺ひますが、檀那を前に御覽下さいませ、か、奥様を先に御覽下さいませ、か、方醫師の言はれるには、それは無論御夫人を先に見ます、そこでこの從僕は彼の者の手から、かの風呂敷包を受取つて持つて出て行つた、かの者は一の腰掛に坐つて待つて居た、大勢皆な診察を受けて行つた、方醫師はかの者に、汝も患者なるかと尋ねた、かの者が申すには、私は診察を受けるも

估衣舖
古着屋

眼班的
從僕

女皮襖
毛皮ノ上衣襖ト
ハ袖無牛襖ノ如
キモノ
合式
凡テ物ノ能ク適
ヘルチーイ
トイ

のではありませぬ、私は古着店の者です、此處で汝の從僕が衣類を持つて來らるゝのを待つて居るので、方醫師はこの話を聞いて甚怪み、問はるゝには私の何の從僕で又如何なる衣服を持つて來た、彼の者の言ふには、それは先刻私と一所に參つた、あの從僕です、汝は彼に夫人が前に見ると言はれたではありませぬか、彼は直ぐと衣服を内に持込んで行きました、方醫師重ねて問はれたには、彼はどんなに汝方に話しをしたのだ、彼は私の從僕だと、全體それは如何衣服を持つて來たのか、かの古着屋の者が申すには、かの人は今朝、私共の店に來て、申されますには、自分は汝の召使の者である、汝が一着の婦人用の毛皮の上衣を買ひたいと言つて居らるゝから、取敢へず持つて來て見せよ、氣に入らば買はるゝから、私共店の者に一人隨つて來いと言はれました、そこで私は彼に隨つて參りましたのです、方醫師の申さるゝには、私は汝に話すが、あの者は私の從僕ではない、私も彼は何者であるか知らないのだ、彼は昨日來て私に申すには、彼は某邸に居る者で、彼の主人と夫人とは今皆病

氣で、此方に診察を請ひに見えますから、私に今朝宅で待合して居て下さい、先刻彼が入り來て、私に問ふには、檀那を前に御覽下さるか、御夫人を前に御覽下さるか、私は必定彼共の主人夫婦が來られたことと思ふて、それは無論御夫人を前に見ると言つた、私の言つたのはそれは前に診察するとの事で、私は一向何事も衣服のことは知らない、汝は今疾く彼を搜索に行きなさい、この古着屋の者はこの話を聞いて、初めてかの者はかたりに、彼の衣類を騙取られたものだと思ひました。

第三十八章

郭福。はい。おまへは行つて先生を招待して來い。先生が御入來になりました、表ての部屋に御出です。あゝ、先生御疲れは息まりましたか。はい、汝も御休息なさいましたか。私はあまり疲勞を覚えませんでした、私は今日先生に一つ御相談申したいと存じます。何事ですか。それは御互此度の旅行に私の作つたあの日記は是非修飾を加へて誰れかに清書させなければなりません。それ

外間屋裏
入口ノ座敷、今
假ニ支障ト稱ス
歌過之來了
旅行後主客初メ
テ相見ル時ノ挨拶
之
附修飾
修飾
正
抄寫也

挑合字眼兒
在一字一句之間
挑出平納之意

萬籟
天子

嗚呼
怒鳴り付ク、叱
記下
記下

切
キツト、確ノ意

假比
例へば

恍惚
ホシヤリ、無意

眼頭裏
手許ノ意、膝許

老手
老功、有眼

踏付ク

やんと言ふのを御聞きなさい。疾く咄したまへ、その後は何うなり
交したか。彼は既に老太監を師とし諸事指圖を受け世話を頼んだ。
老太監は彼を大内に入れて勤務させた、或日大内から御膳をとの御意
を傳へられた、この田舎者が口上に天子様が晝飯を食ひたいと老太監
は聞付けて直に彼を叱り付けて言はるゝには、汝馬鹿を言ふな、汝は天
子様が御膳を召させ給ふと言へと、彼はこの話を聞いて記臆した、或日
群臣に宴を給ふと御意があつた、この田舎者が又口上には天子様が宴
會をしたいと、老太監は直に復た彼に言はるゝには、汝は言誤つて居る
汝は天子様が御宴を張らんと仰せらると言ふべきだ、汝は此後確と記
臆して居れ例へば大内の花園は御花園といひ、かの禁裏守護の兵士は
御林軍といふのだ、この田舎者はこの話を聞いて成程と大ひに悟り、心
中思ふには道理で天子様の御手許の物には、總て御の字を上添へる
のだな、我れは今漸く了解した、これからは自分も物識だ、斯て一日彼は
御花園の入口を通つたが、圖らず隻脚に尿を踏みつけた、彼は大層立腹

澁
ナダレ、廣路ガ
リタル貌

典史
官名
薄給ニテ物足ラ
スライフ

有興
味アリノ意

兩塊
竹板ヲ得

兩片
竹板ヲ得

走也
片竹板ヲ得

五個
巴不得

用利
大不能專白

六路
通可以打人

七品
堂官

八字
形也

九品
土壇

典史
當九品官

して罵らうとしたが、ふと心付いて、事によると天子様の放給ひし尿で
はないかと、そこで彼は臆てそのべた尿を指して言ふには、私は若もお
まへを御史(御園と音相通ずるなり)だと見なければ、私は一息罵るべきに
と言つたさうです。今日は幸に御史が座中に居ないから好いが、若
も居たならば汝の口は疾に人に擽り腫らかされて居るのだ。私の
口は腫れませぬでした、汝も何か一つ御咄なさい。私のこの笑談は
典史を冷かしたことです。これは面白い、私共皆聞きたい。これ
は典史の十令といふことです。何を十令といふのです、汝疾く御咄な
さい。御聞きなさい、初命の榮叫ひ得、二枚の割竹で人を拂ひ得、三十
兩の俸給が領し得、四方の村々の村長を呼出し得、五ツ位は頬を殴き得、
六ツの司に照會を發し得、七品の堂官は望み得、八字形の門牆を築くこ
とを得、九品の位紋を縫付け得、十分に得意にはなれない。可笑い話
だ、その九句は總て好いが、終の一句がぶつこわしだ。今日若しも典
史が聞いたならばどうして汝を怒らませうか。

第四十章

汝この一兩日は唯家にばかり居て年越しをして、少しも外出なさいませんでしたか。 私は毎晩外出します。 それならば汝は何故私の處に御入來下さいませんか。 私はこの一兩日は數人の友達と晩には存古齋骨董店の門口へ謎を判じに行きました。 誰が出したのです。 それは或舉人が出したのです。 作り方は何うです。 作はまわ可い方です。 汝は幾題か御判じになりましたか。 私は數題判じました。 一體何ういふのです。 私の判じましたのは、一つは點の無い言の字を四書（四書）の四句で判じるので。 何の四句で御判じになりましたか。 御咄下さい。 一句はは何言也、一句は吾與點也、一句は前言戲之耳、一句は誠哉是言也です。 之は好く出來て居る、汝はよう御判じになりました。 私はまだ一つ判じました、これは三句の話を一字で中るので。 汝疾く御咄し下さい、如何いふ三句の話を一字で中るので。 御聞きなさいませ、子路曰是也、顔回曰似也、孔子曰

打燈虎兒
掲げ列中
謎ナ中ツレバソ
レナ謎メ掲タル
没點の言字
一語也、首頂
形耳也、即首
是言也、即首
字ノ意

爲難
難儀スル、困ル

無ノ字ノ厄...

節孝祠的祭品
貞節孝行ナリシ
食之者寡ノ意
子路不對ノ意
合ハメトノ意
音ナルコトノ意
不對ノ意ナリト
山ノ意
兒道邊ノ水、那邊
支那ニテ守ナ
ガ常ニテ守ナ
水ノ流被方ニハ
向テテ道ニ注
テ子供ノ守テセ

非也、真在其中矣とありましたから、セの字だと判じました、猶一ツあります、それは四句の語を一字で判じるので、それは十字口中樑、莫作田字猪、無頭又無尾、悶死一秀才といふ題です、私は魚の字と判じて中りました。 この二題の作り方も大層巧みです。 私は昨晚復二ツ判じました、一ツの累朝事蹟過龍門といふ題で四書の中にある人名で判じるので、是は史魚です、又一ツは節孝祠的祭品といふ題で、四書の中の一語で解くのです、これは食之者寡です。 この二句は何も巧みです。 猶私の或友人が一ツ中てたのがあります、それは圍碁盤内着象棋といふ題で、四書の一語で解くのです、これは子路不對です。 これは愈巧妙です、私は汝に御話しますが、數年前私も一ツ謎を判じたことがあります、それは東街洶溝、西街不乾淨といふ題で、二句の兒守語で解くので、是は道邊兒有水、那邊兒有鬼です。 これは猶更妙です、私が思ふのに、今言つた、あの舉人の作つた數題の如きも、まわ好い方の部です。 私は猶一ツ汝に御咄し申すことがあり、ます去年私の或友人があつて、彼

併し私は近頃當地に來たもので、未人を使ふたどがないが是非請人は要るのか何うか。それは檀那の御意任せです。それでは斯うせう、汝が彼を周旋してくれたのだから、汝が請人になつては何うか。宜しう御座います、それでは彼は何日から差出させようか。ひ、今日は二十八日晦日まで尙二日ある、寧ろ來月の一日になつてから寄越してくればよろしい。左様致しませう又彼の寢具なども皆彼れに一齊に持参させるがよい。はい、而して彼の部屋を御取極め下さらなければなりません。私はこの庭外れのあの白塀の後に、湯殿の西に沿ふて、南向のあの明家に彼を住せよと思ふ、何ふだらう。それは至極宜しうございます。此處へ某檀那から、使が來まして、この書面を持つて参りました、御覽に入れませう。某様から私を呼びに來たのだから、私は直に行く、そんならこの事に就いては、まあその様に計らへば宜しう。

第二章

僅頭兒
外レ、隔
向陽兒
南向
開屋子
明き間
敢白
實ニナドノ意
字兒
書付、手紙

錫鐵
洋製力
續上
續足ス、入足ス
白各兒
自身
迷迷糊糊
露ノ分ラマ
瓶
入ル、意
瓶
浪也
往後
今後
茶盤兒
茶盆

おい。はい。先生に茶を煎れて上げよ。檀那何の茶を煎れるのですか、珈琲ですか、紅茶ですか。兩方ともいらない、日本茶を煎れよ。檀那この錫の罐の茶は皆無くなりました。それでは奥座敷のあの戸棚の第二段目の棚に、鉄力の罐があるだらう、あれを持つて來い、今後おまへは氣を付けて何時でも、この罐の茶が無くなりかけたならば私が言付なくても、汝は入れ足して置け。はい。汝急いで茶を取りに行け、私が自身に煎れるから。先生に何の茶碗の茶が佳いか御覽に入れて、佳いのを何れなり御あげ申せ……しかし汝は昨日うかうかと、どれだけ葉茶を入れたのか、あの茶の煎し方はどんなに濃くて苦くて全く喫むことが出来なかつた、汝は昨日吳の若檀那が茶を喫まれる時に、苦くて眉を皺められたを見なかつたか。はい、今後私は茶を煎れる時には注意を致します。汝は其茶机の上の、茶盆の中に排べてある、あの急須や茶碗や茶托を皆持つて來い、而してその火鉢に火があるかないかを見ておけ。はい、火が消えかゝて居ります。

用功
勉強
菓子
煙草
盆

煎
炊也
勻溜的
ムラナク煮エタ
ル説

道陳兒
汝
汝山
河南省ノ汝州府
ロリ産スル燒物
沉
東也

おい。はい。今日私は少し不快だ、先生が見えたらば、先生に私は今日稽古は致しませぬと申上げ、私は加減が悪いから又先生を座敷に通すに及ばぬ。はい。汝その腰掛を持つて来て、煙草盆をその上に載せて置け、私は今朝菓子類を喫べない、唯珈琲ばかり持つて来ればそれで好い、而して又料理人に私の飯の仕度はするに及ばぬ、直に私に少し粳米の粥を炊いてくる、やうに言付けてくれ、柔かくよく煮えたのが宜しい、併し飯粒の碎けないやうにして、除りうすくもなく濃くもなく、むらのないのが好い。はい。汝は私に蒲團をも少し上方に掛けてくれ。はい、檀那今頃は少し御宜しう御座いますか、先刻買へと御申付の花は買ふて参りました、あの汝窓燒の花瓶に挿しては如何で御座いますか。宜いとも、いま私の頭はやはり重く又少し嘔氣がする、汝は直ぐに私の名刺を持つて、我々の公使館へ用吉先生を招待しに行け。あの用吉先生は往診をなさいますか。往診はなさらぬ、これは懇意づくものだ、その上彼の醫術は名高いもので、當地に來

撲空
不在ノ處ニ行キ
合ハス意

施療院
宗教ノ機關ト
シテ西洋人ノ
設立シタル病
院
ダツナロン氏

紅酒
葡萄酒

酒
木栓拔

てから、日は尙淺いにも拘らず、この北京では頗る有名だ。左様です、私も支那の或檀那がたが用吉先生の御治療はよく驗くと言つて居られたのを聞きました。併し困つた事がある、支那人で彼と交際して居るものは始終おの人に來診を請ふので、それ故宅に居る時が少い、それで汝が今時分行つても留守ではないかと氣遣ふ。幸ひ檀那の病も重くはなし、若も彼の方が留守でしたら、一寸外の醫師に來てもらひませうか。む、その時には汝は支那の醫師を頼んで來ても宜い。私共の醫師は漢法ばかりで西洋流の醫術には通じませぬ、檀那施療院の徳先生に來診を請はるればなんと至極妙ではありませんか。む、む、それも宜からう。申し上ます、丁度用吉先生が訪問に見えまして。これは眞に仕合だ、疾く御通し申せ、其方は酒と菓子とを用意して置け。檀那、何酒を開けませうか。三鞭を開けよ、葡萄酒も有つたら持つて來い、菓子か果物か見てあるものを何でも宜いから直に持つて來い。はい、檀那あの木栓拔は御片付になりましたか。それ

油漬イ物
 南清地方ヨリ
 出ス特ニ浙江
 紹興府ヨリ出ツ
 ルモノ最モ名ア
 リ造酒ノ原料ハ
 棧酒ナリ
 高梁ヨリ製セル
 焼酒ナリ
 清酒ニテ醸造ス
 飲ハ演劇ナリ
 支那ノ演劇ハ
 クコトニ重キヲ
 置ク故ニ醜態ト
 イフナリ
 宜座敷
 高座敷
 支那ノ演劇ニテ
 舞臺ノ観席ハ
 腰掛ニ凭リ觀劇
 スルナリ故ニ衆
 子トイフナリ
 下場、上場
 舞臺ヨリ見テ右
 方ヲ下場トシ左
 方ヲ上場トス
 演劇
 討取スル意
 對面見
 對面見

めか心持地が宜しいだが詭へる料理は淡泊なのが宜し、油漬イのはい
 らない。 檀那は何ういふ種類の料理が皆様の御口に合ふと思召し
 ますが。 われ丈の菜の名は私は言ふことが出来ぬ、又おまへつまり
 油漬くない物を選び、見計ふて注文すればよろしい、直段は「卓袱一百
 吊銭でやつてくれ、酒は黄酒がいる、焼酒はいらない。 演劇は御覽に
 なる御積りですか。 支那人が客を招待するには必ず演劇を聴くこ
 とが多いと聞いて居る、私もそういふ風にせう。 高等棧敷は今直ぐ
 極ではないかも知れませぬ、若し無かつた時には机極めて如何です。
 それでも宜い、棧敷をとるなら是非あの柱のない處をさがねばなら
 ぬ。 はい、それでは上場下場はどうでも宜しう御座いますか。 ど
 うでも後が宜い、前はあの銅鑼がいやだ、そうして私は此頃演劇で、對面
 の高棧敷で一人の人が物を食べて居たのを見たが、あれも好いのか。
 何うして宜けないことがありませう、それは大抵あの相公が客に付
 て居る時に物を食べる者が多う御座ります。 相公とは何者か。

戲台見

俵子、片楮也

汝はあの始終舞臺の傍に立つて居る、あの極わかぬけした、小供役者の
 生れ付きのを、御覽になりませぬでしたか。 お、私は想ひ出した、如
 何にも其の様な者が居た、あれは何をするのか。 あれ等は歌を謡ひ、
 御酌にも出ます、若も檀那御覽になりたければ、明日料理屋に御出にな
 り口を掛けて一兩人呼んで酌をさせて御覽なさい、あれも可なり酒興
 を助けるものです。 これも面白からう。 旦那若も軍事が御好み
 なれば、椰子を聴き、世話物が御好みなれば、二黄です。 やはり二黄が
 好い。 それでは三慶ですか、四喜ですか。 四喜にせう。 それで
 は私は直に極めに参ります。 ひ、そうして給仕の酒代や、演劇費は
 明日おまへの手から彼等に渡せばよろしい。 畏りました

第十二章

あの十弗の銭は換えて来たか。 はい皆換へて参りました。 幾何
 に換つたか。 百十四吊四百文に換りました。 一弗が幾何に當る
 のか。 十一吊四百四十文に當ります。 何うして昨日よりも多く

銀盤見
長銀相場
騰貴

清早朝
市上場

九城の
北城内城九門ア
リ故ニイフ城内
即チ京中ノトイ
フ意ナリ
七銀
一匁チ一錢トイ
一匁四銀貨
一匁四銀貨
上簿ノ四銀貨、日
本ノ一匁銀貨何
レニモ通ズ

換つたのだ。はい、今日は銀相場が上りました。何うして又騰つたのか。それは相場の出来が大きかつたのです。これは誰が定めた相場か。檀那汝は御存じありません、この前門外の珠寶市に一個處の銀市場があり、毎日早朝、京中の兩換店の者は皆市場へ銀の買賣に参ります、若もその日に市場の銀が多ければ、相場は直下り、若も銀が少ければ、相場は直上るので、彼等の取引が出来て兩に何程となし、その高が即ちその日の相場になるので、京中の兩換店は皆この同一の相場に依つて、毎日銀を買ふものと銀を賣るものとは一定されぬ、其日其日の相場です。それでは一匁は銀幾何に當るのか。普通は皆な七匁の銀を一匁に出ています、申すのは、あの貿易銀や墨西哥弗は同じです、あの一匁銀貨は些し少く換えますが、平生使ふ時には別に何にも差はありませぬ、それではこの札を御上げ申します、これは皆和豐の本店の振出です。この札の金高は何うしてこんな風な書き方だ、私は全く讀めない。はい、これは五十吊一枚の札で、これは十吊の一枚です、

四恒家
東四牌樓ニアリ
明朝ノ永樂年間
ヨリ創設セル有
名ナリ銀行ナリ

總下
田舎

拵出去
速出シ行キ

これは小札で五吊のと四吊のと三吊のと二吊のとです、これはその四百四十枚の端錢です。左様か、私は自分でこの札を檢める。汝算へて合ひましたか。如何にも皆合つた、だがこの五十吊一枚は遣ひ悪いから、おまへ持つて行つて五吊文の現金を取り殘はと札に破つて來い。畏りました、やはりあの本店のが御入用ですか。若もあの本店のに小札がなければ、他の處のでも可いが、是非その店は信用あるのが肝腎だ。それは無論です、皆四恒家のと取換へれば宜しう御座います。それでは、おまへ直ぐ換に行け。

第十三章

おまへは何處へ行つたのか。今し方私の本家の兄が田舎からまいり私を防ね、申しますには私の母親が病んで非常に重いとて、彼は私を外に連出し、暫時話を致したので、斯く長く暇取り、檀那に申上げることが出来ませんでした。おまへそれは不都合な口上だ、多少の時間何れほどの間出て行くにも、おまへは皆な私に告げなければならぬはづ

勅死

十分ニ壓ク綱ル

オイフ

探訪開

ユルメキ動イテ

開ク

軟宿子

腹廣

白拜服

小キヤ靴

んで解けて来ない様にせねばならぬ、おまへは急いで下男に二枚の油紙を買はせ遣て、あの絹物を包め。はい、あの暖簾は外して捲いてはいけませぬか。それも宜い、まだあるあの旱傘もくびり付け、又この文房具は皆手箱の中に入れておけ。只今汝の夜具も、もう皆仕舞ひませうか。拾の夜衣と綿入夜衣丈皆疊んで夜具包に入れ、あの蒲團は明日も又車に敷かねばならぬ。はい、明日あの馬遣包箱は、車の後の方へ付けたら、何うでせう。宜からう、あの陶器は紙で水張りをした、上で詰めれば間違ひなし。この仕方は至極妙です。檀那申上げます、某檀那から使が参りまして、餞別品を送つて来ました。持つて来い、それでは私の名刺を渡してやり、歸つて能く禮を言はすればよろしい。

第十八章

おまへは何を爲て居たか。私は花園で花に水を澆けて居ました。あの花は開いてどうだ。唯今丁度満開で咲いたのは、實に見事です。なせ、汝は此の手のこんな泥は。私は花園で土をいぢつて居まし

一回事
暫時ノ間ニ出来
ル事デストノ意
粗活
荒仕事
原不講究
セズ也
好イガトノ意
小奇麗
時同チ費ス
職名
官職ノ入レアル
名刺

檼東四
柔カク懐レヤス
掛物
掛也
挑也
掛也

たから。汝は後程飯を喫べたなら、私は汝に進物を持たせてやりませう。それは何方御進物を持つて行くのですか。それは後門の徐様へ禮物を遣るのだ。それでは私は今の間に、一寸頭を剃つて来ませう。おい、おまへは只頭を剃るばかりでなく、辨髪も結ばなければならぬのだらう。頭を剃つて髪を結ぶのは、一度です。おまへはもう少し奇麗な衣裳と看換えなさい、平生宅で荒仕事をして居る時分は、何うでも宜いが、他の邸に行くには、是非小奇麗にしなければ、見苦しい。靴も帽子も私は有りませぬもの。おまへは仲間の者に帽子と靴とを借れば好いではないか、おまへは疾く片付けに行け、愚圖々々するな。檀那私は皆片付けて仕舞ひました、何ういふ御用か、何卒御申付下さい、又その御進物は用意出来ましたか。さらん、この四箱の品だ、これは私の官名だ。それでは私は一臺雇うて来なければなりません。好けない、この中には微弱な物があるので、車では揺る虞がある、そうしないで人夫に擔はして、おまへに隨つて行らう。はい、

香氣

百無二價
掛價ナシトノ意
ニテ格ニ用井ラ
ル、商賈用語ナ

泡菓子、漬子
ナリ
ナリ
ナリ

平菓
ナリ

酸菓
ナリ

ザクツイタル菓

菓料

想
忘レズニノ意

...

ことは致しませぬ。凡て商賈人の風習は皆掛値を言ひたがるから、汝も彼等のいふまゝにならずに是非値切れ。檀那は御承知ありませぬが、彼等のあの大きな商店では都て確實なので掛直は致しませぬ。それならば宜しい、ほかにおまへは城外で、少し新しい果物を買つて来い。檀那何んな果物が御入用ですか。杏子と李がまだあるだろうか。その二種の果物はもうなくなりました。それでは、梨、桃、平菓、林檎と楨子と生菓、葡萄と些丈買へ。一品何れ程買ひました。長りました。おまへこの四十吊文の札を持つて行つて、此れだけのものを買つて、残つた錢で忘れずに氷砂糖と葛とを買ふて来い。はい、それでは私は今から直に参りませうか。少し待て、こゝにまだ十吊文の悪い札がある、おまへ珠市口あの萬順毛皮店に持つて行つて、店の者にこれは偽札だから店の者に其場で換えさせ汝に渡して持ち歸せとはなせ。檀那汝は何うして彼處の偽札だといふこ

找給我的
釣錢ニロコシタ
ノ釣錢ヲ找錢
トイフ

熱
眼意ノ意

第二十章

とを御存じですか。私はあの店から受取つたのだ、その上これは五日六日前に、あの店で買物をした時に釣錢に寄起したのだ。檀那あちらへ他に御用はありませぬか。まだ用がある、おまへ歸る時に序に何時もの仕立屋に行つて、私の誂へたあの服が出来て居るか問ふて、若し出来上つて居たならば、おまへ風呂敷に包んで持つて歸れ。

張福。はい。おまい来い、私はおまへに話す事がある。はい、檀那何の御用ですか。今度或檀那が廣東の領事官に昇進して行かれるが、従僕を一人探して居られる、私はおまへを周旋せうと思ふが、おまへ行きたいか行きたくないか。檀那の御引立にあづかり、私は行きたう御座りますが、幾年行つて居なければならぬのですか。その檀那は廣東には大抵三箇年居なければなるまい、その方は汝があちらで三年辛抱してもらいたいのだ、おまへの意向は何うか。それは宜しう御座います。併し一ツいふとがある、若も將來三年の任期が満ち

て、その檀那が他へ榮轉して行けば、その方がおまへに船賃を與へて歸して下さる。若又三年経たない前に向ふからおまへに暇を出す時にもやはり向ふで汝に船賃をやり歸して下さる。併し或ひは三年経たない前におまへの方から斷つて歸りたいとなればそれはおまへが旅費を自辨するので向ふでは一切構はないのだ。左様ですか私は皆分りました。而して給料の事はその檀那が言はれるには、毎月十弗の給金で四季の衣類は總てその檀那が爲てやるとおまへは何う思ふか。十弗の給料は私には結構です。さうして檀那から御話しをして戴きたいことが二件あります。二件とは何ういふ事か。一つは先づその檀那に頼んで、家族の手當に十弗渡して戴きたいのです。今一つは毎月の給料はこの北京内で私の家族へ五六弗づゝ渡して貰ひたいのです。さすれば私が外から京に送金をする手數が省けますから。それは私が言へば出来るだらう。併しおまへが家族の手當として前借するその十弗は汝へ月々何うして差引勘定をする積りなのか。それは、

安家的錢
家族ノ生計費

手數、面倒

扣法
扣除ノ仕方

その檀那の御隨意で毎月一弗でも二弗でも御引き下されたい。それはそれで宜い。若もその檀那がこの二件を御聽入下さいましたならば、私の願がひは毎月檀那の御手から私の家へ渡金下されば安心なのです。それは皆易い事だ。相談が纏つたらば私が受金證書を書いておまへに渡し、毎月一日におまへの宅から人をよこしその證書を持つて私の方へ来て取ればよい。御心配を掛けます。そうして私が暇を頂戴致しました後で、檀那外に従僕を御捜しにならなければならぬことはありませんか。私の親類の者で使ふて頂いても好いものがありますか。何うで御座いますか。おまへのその親類の者は年はいくつか。はいその者は今年十八歳です。奉公をしたことあるのか。はいその者は以前露國の公使館に勤めて居ました。その事はまわ追ての事にせう。なせならば今或檀那から一人周旋して呉れて、一兩日試に使つて見る若も好くなかつた時にはおまへのその親類の者に來て貰はう。はい私は檀那の御沙汰を待つて居ります。

多大了
幾歲ナルカノ意
俄國
露國

新手兒
新参ノ者
上工
著手スル、初メ

おまへはこの一兩日の中に私の道具類を皆片付けて置き、今度来る者に交代し易ひように、外の拂方なども皆精算せねばならぬ。はい、若も極まりましたならば、私は何日から御奉公に出ませうか。今日から月末迄には猶八日あるどうで来月一日から行くが宜からう。それでは左様致しませう。

官話指南第四卷

官話問答

第一章

欽差
特命全權公使
王親王
中堂
大臣也尙書官等
大人
三品以上ノ大官

この方は我が新任の公使閣下です、親王殿下大臣各位に御挨拶の爲に態々御出になりました。お、久しく高名を欣慕して居ました、今日幸に御面會を得ましたのは、眞に御縁がおりました。我が公使閣下が親王殿下大臣各位の御機嫌を伺はれます。お、御蔭を持ちまして、公使閣下には何卒上座に御着席下され。我が公使閣下が左様には着席致し兼ねますやはり親王殿下の上座に御着席を願ひます。どうして其の様なことが出来ませうを、公使閣下には今日初めて敝署に御入來下されたことなれば、當然上座に御着席なるべきです。我が公使閣下が左様ならば、仰に従ひますと仰せられます。當然のことです、閣下には幾日に御着京なさいましたか。我が公使閣下は貴

國の本月十六日に到着せられました。我々等は久しく以前から、この公使閣下が萬事公平で、尤も和好を重んぜらるゝと聞ひて居ります。今已に若せられ敵國に駐劄せらる事あれば、屹度正義を持して和衷商辦せられ、兩國の人民に均しく利益となり、實にこの上もない幸福です。我が公使閣下には、親王殿下大臣各位の御過稱を蒙り、實際自分は短才にして、叨に重任を膺しは、慚愧に堪へませぬ。萬事尚ほ親王殿下大臣各位の御指教を仰ぎたうございませと、仰せられます。公使閣下は寔に御謙遜に過ぎます、我々共こそ萬事公使閣下の御指導を仰ぐべきです。我が公使閣下は恐縮ですと、仰せられます。公使閣下は本年御幾歳か伺ひます。我が公使閣下は本年六十一歳です。閣下は既に六十を逾えられて御容貌が猶此のやうに饒饒たるは、非常に御攝生が御宜しいのです。……おゝ。は。菓子と果物とを出して、急いで酒を畑して來い。我が公使閣下が、今日は初めて貴衙門に伺つたので、何うして御馳走に與ることが出來やうにと、仰せられま

養法
御攝生
意要請ニ奔走スル

就遠了
不親密ノ意

賞臉
賜光也

不成格局
禮儀ヲ爲サズ失
禮テストノ意

す。閣下のその仰せは、御遠慮に過ぎます、我々共は今日初めて公使閣下と御面會致したのなれど、はや舊交のやうに感じます、その上これは少しの粗菜を用意した斗りで、それは暫時御談しを願ひたひからで、何卒閣下には左様仰せられず、御辭退下されますな。我が公使閣下は親王殿下、大臣各位に此のやうに御配慮下され、寔に恐縮に堪へませぬと仰せられます。どう致しまして、これは寔に失禮千萬ですが、何卒閣下には悪からず御思召下されたし。痛み入ります、我が公使閣下には盛筵過ぎますと仰せられます。何も御座りませぬ、寔に不體裁なことです。先づ閣下に御杯を獻じます。我が公使閣下はそれでは寔に痛み入りますと仰せられます。閣下何卒御着席を。我が公使閣下は御返禮として、親王殿下に御杯を獻じたいと仰せられます。それでは私が眞に痛み入ります。それでは私が代つて親王殿下大臣各位に返杯を仕りませう。貴官は客です、我々共が如何して受けられませう、やはり各自酌を致します。それでは私は謹ん

破頭破頭
頭ヲ地ニテ叩ク
ナイン平伏極マ
ル時ノ挨拶語ナ

た。何う致しまして閣下には御見送り下されませぬ。御構ひなく御召し下さい。恐れ入ります。

第三章

何卒閣下御面會を願ひます。この御方は我が新任の公使閣下です。今日は閣下を御訪問の爲に態々御入來になりました。あゝ久しく御高名を伺つて居ました。我が公使閣下は閣下の御機嫌を伺へと仰せられます。オ、公使閣下にも御機嫌宣布。我が公使閣下は御蔭で無事と仰せられます。貴國大皇帝陛下には近頃聖體御安泰に渡らせらるゝや。はい、我が公使閣下は我が大皇帝陛下には近日頗る御安泰に渡せられます。貴國大皇帝陛下にも近頃御安泰に渡らせらるか伺ひ申上ぐると仰せられます。はい、我が大皇帝陛下にも近頃頗る御安泰に渡せられます。さあ何卒閣下には上座に御着席を。我が公使閣下には閣下の上座に着かせられんことを望まれます。痛み入ります。公使閣下が此處に御入來下さらば上座に御着席あるは

新聞
珍ラシキ事

當然です。我が公使閣下はそれは餘り失禮でありますと仰せられます。何卒御着席を、公使閣下には何日御國を御出立になりましたか伺ひます。我が公使閣下は敵國の客月十日に出發せられたので御座います。途中も定めて御安全で御座りましたでせう。はい、我が公使閣下には全く御蔭で途中は安全でありましたと仰せられます。閣下上海には幾日間御滞在になりましたか。我が公使閣下は上海には僅々二日逗留せられたばかりで當地へ參られたのです。途中御陸行で御出になれば可也遠路です。何か珍事もありましたらう、我々共は承りたう存じます。我が公使閣下は沿路に古蹟は少うはございませんでしたが、併し現今の國政に關係するやうな事に就いては何も新しく聞き込んだことはありませんでしたと仰せられます。左様でしたか。どうして閣下の御上京の御日取は何日と御取極になりましたか。我が公使閣下には明後日北上せらるゝ豫定です。閣下の御發足は其様に御急ぎには及びませぬ。赴任期日が迫つて